



李陵

中島 敦



青空文庫





漢^{かん}の武帝^{ぶてい}の天漢^{てんかん}二年秋九月、騎都尉^{きとゐ}・李陵^{りりよう}は歩卒五
千を率い、辺塞^{へんさい}遮虜鄣^{しやりよしやう}を發して北へ向かつた。阿爾泰^{アルタイ}
山脈の東南端が戈壁沙漠^{ゴビさばく}に没せんとする辺の磽确^{こうかく}たる
丘陵地帯を縫つて北行すること三十日。朔風^{さくふう}は戎衣^{じゅうい}を
吹いて寒く、いかにも万里孤軍來たるの感が深い。
漠北^{ぼくほく}・浚稽山^{しゆんけいざん}の麓^{ふもと}に至つて軍はようやく止營した。す
でに敵匈奴^{きやうど}の勢力圏に深く進み入っているのである。

秋とはいっても北地のこととて、苜蓿うまじやしも枯れ、榆にれやかわやなぎ柳の葉ももはや落ちつくしている。木の葉どころか、

木そのものさえ（宿營地の近傍きんぼうを除いては）、容易に見

つからないほどの、ただ砂と岩と磧かわらと、水のない河床

との荒涼たる風景であつた。極目人煙を見ず、まれに

訪れるものとしては曠野こうやに水を求める羚羊かもしかぐらいのもの

である。突兀とつこつと秋空を劃くぎる遠山の上を高く雁かりの列が南

へ急ぐのを見ても、しかし、将卒だれ一同誰一人として甘

い懷郷の情などに唆そそられるものはない。それほどに、

彼らの位置は危険極きわまるものだったのである。

騎兵を主力とする匈奴に向かつて、一隊の騎馬兵をも連れずに歩兵ばかり（馬に跨またがる者は、陵とそのばかりよう幕僚数人にすぎなかった、）で奥地深く侵入することからして、無謀の極きわみというほかはない。その歩兵も僅わずか五千、絶えて後援はなく、しかもこの浚稽山しゅんけいざんは、最も近い漢塞かんさいの居延きょえんからでも優に一千五百里（支那里程）は離れている。統率者李陵への絶対的な信頼と心服とがなかったならとうてい続けられるような行軍ではなかった。

毎年秋風が立ちはじめると決きまって漢の北辺には、

胡馬こばに鞭むちうった剽悍ひょうかんな侵略者の大部隊が現われる。辺
 吏が殺され、人民が掠かすめられ、家畜が奪略される。
 五原ごげん・朔方さくほう・雲中うんちゆう・上谷じやうこく・雁門がんもんなどが、その例年の被害
 地である。大將軍衛青えいせい・嫖騎將軍霍去病かくきよへいの武略によつ
 て一時漠南ばくなんに王庭なしといわれた元狩げんしゆ以後元鼎げんていへかけ
 ての数年を除いては、ここ三十年来欠かすことなくこ
 うした北辺の災いがつづいていた。霍去病かくきよへいが死んでか
 ら十八年、衛青えいせいが歿ぼつしてから七年。浞野侯趙破奴さくやこうちやうはどは全
 軍を率いて虜ろに降くだり、光祿勳徐自為こうろくくんじよじいの朔北さくほくに築いた城
 障もたちまち破壊される。全軍の信賴つなを繫つなぐに足る

將帥しょうすいとしては、わずかに先年大宛だいえんを遠征して武名を挙げた貳師將軍李広利りこうりがあるにすぎない。

その年——天漢二年夏五月、——匈奴きょうどの侵略に先立って、貳師將軍が三万騎に將として酒泉しゅせんを出た。しきりに西辺を窺うかがう匈奴の右賢王うけんおうを天山に撃とうというのである。武帝は李陵に命じてこの軍旅の輜重しちようのことに当たらせようとした。未央宮びおうきゆうの武台殿ぶたいでんに召見された李陵は、しかし、極力その役を免ぜられんことを請うた。陵は、飛將軍ひしやうぐんと呼ばれた名將李広りこうの孫。つとに祖父の風ありといわれた騎射きしゃの名手で、数年前から

騎都尉きとゐとして西辺の酒泉・張掖しゅせん・ちやうえきに在あつて射しゃを教え兵を練れんつていたのである。年齢もようやく四十に近い血氣盛りとあつては、輜重しちようの役はあまりに情けなかつたに違ちがひない。臣が辺境に養うところの兵は皆荊楚けいその一騎当千の勇士なれば、願ねがわくは彼らの一隊を率りいて討うつて出いで、側面から匈奴の軍を牽制けんせいしたいという陵の嘆願うなずには、武帝も頷うなずくところがあつた。しかし、相つづく諸方への派兵のために、あいにく、陵の軍に割さくべき騎馬の余力がないのである。李陵はそれでも構かわぬといつた。確かに無理とは思われたが、輜重しちようの役など

に当てられるよりは、むしろ己おのれのために身命を惜しまぬ部下五千とともに危おかうきを冒すほうを選びたかったのである。臣願わくは少をもつて衆を撃たんといった陵の言葉を、派手はで好きな武帝は大いに欣よろこんで、その願いを容いれた。李陵は西、張掖ちようえきに戻つて部下の兵を勒ろうくするとすぐに北へ向けて進発した。当時居延きよえんに屯たむろしていた彊弩都尉路博徳きようどといろはくとくが詔を受けて、陵の軍を中道まで迎えに出る。そこまではよかつたのだが、それから先がすこぶる拙まずいことになってきた。元來この路博徳ろはくとくという男は古くから霍去病かくきよへいの部下として軍に従い、邳離侯ふりこう

にまで封ぜられ、ことに十二年前には伏波將軍ふくはとして
十萬の兵を率いて南越なんえつを滅ぼした老将である。その後、
法に坐ざして侯を失い現在の地位に墮おとされて西辺を守つ
ている。年齢からいっても、李陵とは父子ほどに違ふ。
かつては封侯ほうこうをも得たその老将がいまさら若い李陵ご
ときの後塵こうじんを拝するのがなんとしても不愉快だったの
である。彼は陵の軍を迎えると同時に、都へ使いを
やつて奏上させた。今まさに秋とて匈奴きようどの馬は肥え、
寡兵かへいをもつてしては、騎馬戦を得意とする彼らの鋭鋒えいほう
には些ちか当たりがたい。それゆえ、李陵とともにここ

に越年し、春を待つてから、酒泉・張掖しゅせん ちやうえきの騎各五千をもつて出撃したほうが得策と信ずるという上奏文である。もちろん、李陵はこのことをしらない。武帝はこれを見ると酷ひどく怒った。李陵が博徳と相談の上での上書と考えたのである。わが前ではあのとおり広言しておきながら、いまさら辺地に行つて急に怯おじけ気づくとは何事ぞという。たちまち使いが都から博徳と陵の所に飛ぶ。李陵は少をもつて衆を撃たんとわが前で広言したゆえ、汝なんじはこれと協力する必要はない。今匈奴が西河せいがに侵入したとあれば、汝なんじはさつそく陵を残して西

河に馳はせつけ敵の道を遮さへぎれ、というのが博徳への詔で

ある。李陵への詔には、ただちに漠北ばくほくに至り東は

浚稽山しゅんけいざん

よりよろこすい

浚稽山から南は竜勒水の辺までを偵察觀望し、もし異

状なくんば、浞野侯さくやこうの故道に従つて受降城に至つて土

を休めよとある。博徳と相談してのあの上書はいった

いなんたることぞ、という烈はげしい詰問きつもんのあつたことは

言うまでもない。寡兵かへいをもつて敵地に徘徊はいかいすることの

危険を別としても、なお、指定されたこの数千里の行

程は、騎馬を持たぬ軍隊にとつてははなはだむずかし

いものである。徒歩のみによる行軍の速度と、人力に

よる車の牽引力と、冬へかけての胡地の氣候とを考えれば、これは誰にも明らかであつた。武帝はけつして庸王ではなかつたが、同じく庸王ではなかつた隋の煬帝や始皇帝などと共通した長所と短所とを有つていた。愛寵比なき李夫人の兄たる武師將軍にしてからが兵力不足のためいったん、大宛から引揚げようとして帝の逆鱗にふれ、玉門関をとじられてしまった。その大宛征討も、たかだか善馬がほしいからと思ひ立たれたものであつた。帝が一度言出したら、どんな我儘でも絶対に通されねばならぬ。まして、李陵の場

合は、もともと自らみずか乞こうた役割でさえある。(ただ季節と距離とに相当に無理な注文があるだけで) 躊躇ちゆうちよすべき理由はどこにもない。彼は、かくて、「騎兵を伴わぬ北征」に出たのであつた。

浚稽山しゆんけいざんの山間には十日余留とどまつた。その間、日ごとに斥候せつこうを遠く派して敵状を探つたのはもちろん、附近の山川地形を剩あますところなく図に写しとつて都へ報告しなければならなかつた。報告書は麾下きかの陳歩樂ちんぽらくという者が身に帯びて、单身都へ馳はせるのである。選ばれ

た使者は、李陵りりように一揖いちゆうしてから、十頭に足らぬ少数の馬の中の一匹うちまたがに打跨ると、一鞭ひとむちあてて丘かけおを駈下りた。灰色に乾いた漠々たる風景の中に、その姿がしだいに小さくなつていくのを、一軍の将士は何か心細い気持ちで見送った。

十日の間、浚稽山しゅんけいざんの東西三十里の中には一人の胡兵こへいをも見なかった。

彼らに先だつて夏のうちに天山へと出撃した貳師将じし軍はいったん右賢王うけんおうを破りながら、その帰途別の匈奴きようどの大軍に囲まれて惨敗さんぱいした。漢兵は十に六、七を討た

れ、將軍の一身さえ危うかったという。その噂は彼らの耳にも届いている。李広利を破ったその敵の主力が今どのあたりにいるのか？ 今、因杆將軍公孫敖が西河・朔方の辺で禦いでいる（陵と手を分かった路博徳はその応援に馳せつけて行つたのだが）という敵軍は、どうも、距離と時間とを計つてみるに、問題の敵の主力ではなさそうに思われる。天山から、そんなに早く、東方四千里の河南（オルドス）の地まで行けるはずがないからである。どうしても匈奴の主力は現在、陵の軍の止营地から北方鄧居水までの間あたりに

たむろ

屯していなければならぬ勘定になる。李陵自身毎日
前山の頂に立つて四方を眺めるのだが、東方から南へ
かけてはただ漠々たる一面の平沙、西から北へかけて
は樹木に乏しい丘陵性の山々が連なっているばかり、
秋雲の間にときとして鷹か隼かと思われる鳥の影を見
ることはあつても、地上には一騎の胡兵をも見ないの
である。

山峡の疎林の外れに兵車を並べて囲い、その中に
帷幕を連ねた陣営である。夜になると、気温が急に下
がった。士卒は乏しい木々を折取つて焚いては暖を

とつた。十日もいるうちに月はなくなつた。空氣の乾いてゐるせいか、ひどく星が美しい。黒々とした山影とすれすれに、夜ごと、狼星ろうせいが、青白い光芒こうぼうを斜めに曳ひいて輝いていた。十数日事なく過ぎしたのち、明日はいよいよここを立退たちのいて、指定された進路を東南へ向かつて取ろうと決したその晩である。一人の歩哨ほしやうが見るともなくこの爛々らんらんたる狼星ろうせいを見上げていると、突然、その星のすぐ下の所にすこぶる大きい赤黄色い星が現われた。オヤと思つてゐるうちに、その見なれぬ巨おおきな星が赤く太い尾を引いて動いた。と続いて、二

つ三つ四つ五つ、同じような光がその周囲に現われて、動いた。思わず歩哨ほしやうが声を立てようとしたとき、それらの遠くの灯ひはフツと一時に消えた。まるで今見たことが夢だったかのように。

歩哨ほしやうの報告に接した李陵りりやうは、全軍に命じて、明朝天明とともにただちに戦闘に入るべき準備を整えさせた。外に出て一応各部署を点検し終わると、ふたたび幕営に入り、雷らいのごとき鼾声かんせいを立てて熟睡した。

翌朝李陵が目を醒さまして外へ出て見ると、全軍はすでに昨夜の命令どおりの陣形をとり、静かに敵を待ち

構えていた。全部が、兵車を並べた外側に出、戟ほこと盾たてとを持つた者が前列に、弓弩きゅうどを手にした者が後列にと配置ぎされているのである。この谷を挟はさんだ二つの山はまだ暁暗ぎょうあんの中に森閑しんかんとはしているが、そここの巖蔭いわかげに何かのひそんでいるらしい気配けはいがなんとなく感じられる。

朝日の影が谷合にさしこんでくると同時に、(匈奴きょうどは、单于ぜんうがまず朝日を拝したのちでなければ事を発しないのであろう。)今まで何一つ見えなかつた両山の頂から斜面にかけて、無数の人影が一時に湧わいた。天地を

撼^{ゆる}がす喊^{かん}声^{せい}とともに胡^こ兵^{へい}は山下に殺到した。胡兵の先登^{せんとう}が二十歩の距離に迫ったとき、それまで鳴りをしずめていた漢の陣営からはじめて鼓^こ声^{せい}が響く。たちまち千弩^{せんど}ともに発し、弦に応じて数百の胡兵^{こへい}はいつせいに倒れた。間髪^{かんはつ}を入れず、浮足立った残りの胡兵に向かつて、漢軍前列の持戟^{じげき}者^{しや}らが襲いかかる。匈奴^{きようど}の軍は完全に潰^{つい}えて、山上へ逃げ上った。漢軍これを追撃して虜首^{りよしゆ}を挙げることに数千。

鮮^{あざ}やかな勝ちっぷりではあつたが、執念深い敵がこのまままで退くことはけつしてない。今日の敵軍だけで

も優に三万はあつたろう。それに、山上に靡なびいていた旗印から見れば、紛れもなく单ぜん于うの親衛軍である。单于がにいるものとすれば、八万や十万の後詰ごづめの軍は当然繰出されるものと覚悟せねばならぬ。李陵は即刻この地を撤退して南へ移ることにした。それもここから東南二千里の受降城じゅこうじょうへという前日までの予定を変えて、半月前に辿たどつて来たその同じ道を南へ取つて一日も早くもとの居延塞きえんさい（それとて千数百里離れているが）に入ろうとしたのである。

南行三日めの午ひる、漢軍の後方はるか北の地平線に、

雲のごとく黄塵こうじんの揚がるのが見られた。匈奴騎兵の追撃である。翌日はすでに八万の胡兵が騎馬の快速を利して、漢軍の前後左右を隙すきもなく取囲んでしまつてゐた。ただし、前日の失敗に懲こりたとみえ、至近の距離にまでは近づいて来ない。南へ行進して行く漢軍を遠巻きにしながら、馬上から遠矢を射かけるのである。李陵が全軍を停とめて、戦鬪の体形をとらせれば、敵は馬を駆つて遠く退き、搏戦はくせんを避ける。ふたたび行軍をはじめれば、また近づいて来て矢を射かける。行進の速度が著しく減ずるのはもとより、死傷者も一日ずつ

確實に殖ふえていくのである。飢え疲れた旅人の後をつける曠野こうやの狼のように、匈奴の兵はこの戦法を続けつつ執念深く追つて来る。少しずつ傷つけていった揚句あげく、いつかは最後の止めとどめを刺そうとその機会を窺うかがつているのである。

かつ戦い、かつ退きつつ南行することさらに数日、ある山谷の中で漢軍は一日の休養をとった。負傷者もすでにかなりの数に上っている。李陵りりやうは全員を点呼して、被害状況を調べたのち、傷の一か所にすぎぬ者には平生どおり兵器を執とつて闘わしめ、両創こうむを蒙る者に

もなお兵車を助け推おさしめ、三創にしてはじめて輦れんに乗せて扶たすけ運ぶことに決めた。輸送力の欠乏から屍したい体はすべて曠野こうやに遺棄するほかはなかつたのである。この夜、陣中視察のとき、李陵はたまたまある輜重車しちようしゃ中に男の服を纏まとうた女を発見した。全軍の車輛しやりようについて一々調べたところ、同様にしてひそんでいた十数人の女が搜し出された。往年関東の群盗が一時に戮りくに遇あつたとき、その妻子等が逐おわれて西辺に遷うつり住んだ。それら寡婦かふのうち衣食に窮するままに、辺境守備兵の妻となり、あるいは彼らを華客とくとする娼婦しょうふとなり果てた

者が少なくない。兵車中に隠れてはるばる漠北まで従
い来たつたのは、そういう連中である。李陵は軍吏に
女らを斬るべくカンタンに命じた。彼女らを伴い来
たつた士卒については一言のふれるところもない。
たにま おうち
澗間の凹地に引出された女どもの瘡高い号泣がしばら
くつづいた後、突然それが夜の沈黙に吞まれたように
フツと消えていくのを、軍幕の中の将士一同は肅然た
る思いで聞いた。

翌朝、久しぶりで肉薄来襲した敵を迎えて漢の全軍
は思いきり快戦した。敵の遺棄屍体三千余。連日の

執拗しつようなゲリラ戦術に久しくいらだち屈していた士氣が俄にわかに奮ふるい立つた形である。次の日からまた、もとの竜城りゅうじょうの道に循したがって、南方への退行が始まる。匈奴きょうどはまたしても、元の遠巻き戦術に還かえった。五日め、漢軍は、平沙へいさの中みいだにときに見出される沼沢地しょうたくちの一つに踏入った。水は半ば凍り、泥濘でいねいも脛はざを没する深さで、行けども行けども果てしない枯葦原かれあしはらが続く。風上かざかみに廻まわった匈奴の一隊が火を放った。朔風さくふうは焰ほのおを煽り、真昼の空の下に白っぽく輝きを失った火は、すさまじい速さで漢軍に迫る。李陵はすぐに附近の葦あしに迎え火を放たしめて、

かろうじてこれを防いだ。火は防いだが、沮洳地そじよちの車
行の困難は言語に絶した。休息の地のないままに一夜
泥濘でいねいの中を歩き通したのち、翌朝ようやく丘陵地に辿たど
りついたとたんに、先廻りさきまわして待伏せていた敵の主力
の襲撃に遭あった。人馬入乱れての搏兵戦はくへいである。騎馬
隊の烈はげしい突撃を避けるため、李陵は車を棄すてて、
山麓さんろくの疎林の中に戦鬪の場所を移し入れた。林間から
の猛射はすこぶる効を奏した。たまたま陣頭に姿を現
わした单于ぜんうとその親衛隊とに向かつて、一時に連弩れんとを
発して乱射したとき、单于の白馬は前脚を高くあげて

棒立ちとなり、青袍せいほうをまとった胡主こしゅはたちまち地上に
投出された。親衛隊の二騎が馬から下りもせず、左右
からさつと单于すくを掬い上げると、全隊がたちまちこれ
を中に囲んですばやく退いて行つた。乱闘数刻ののち
ようやく執拗しつような敵を撃退しえたが、確かに今までにな
い難戦であつた。遺された敵の屍体したいはまたしても数千
を算したが、漢軍も千に近い戦死者を出したのである。
この日捕えた胡虜こりよの口から、敵軍の事情の一端を知
ることができた。それによれば、单于ぜんうは漢兵の手強さてごわ
に驚嘆し、己おのれに二十倍する大軍をも怯れず日に南

下して我を誘うかに見えるのは、あるいはどこか近くに、伏兵があつて、それを恃たのんでゐるのではないかと疑つてゐるらしい。前夜その疑いを单于が幹部の諸将に洩もらして事を計つたところ、結局、そういう疑いも確かにありうるが、ともかくも、单于自ら数万騎を率いて漢の寡勢かぜいを滅しえぬとあつては、我々の面目に係わるという主戦論が勝ちを制し、これより南四、五十里は山谷がつづくがその間力戦猛攻し、さて平地に出て一戦してもなお破りえないとなつたそのときはじめて兵を北に還かえそうということに決まつたという。これ

を聞いて、校尉韓延年こうい かんえんねん以下漢軍の幕僚たちの頭に、あるいは助かるかもしれぬぞという希望のようなものが微かすかに湧わいた。

翌日からの胡軍こぐんの攻撃は猛烈を極めた。捕虜ほりよの言の中にあつた最後の猛攻というのを始めたのであろう。襲撃は一日に十数回繰返された。手厳てきびしい反撃を加えつつ漢軍は徐々に南に移つて行く。三日経たつと平地に出た。平地戦になると倍加きやうどされる騎馬隊の威力にものを言わせ匈奴しやにむにらは遮二無二漢軍を圧倒しようとかかつたが、結局またも二千の屍体したいを遺のこして退いた。捕虜の

言が偽りでなければ、これで胡軍は追撃を打切るはずである。たかが一兵卒の言った言葉ゆえ、それほど信頼できるとは思わなかったが、それでも幕僚ぼくりよう一同些いささかホツとしたことは争えなかった。

その晩、漢の軍侯ぐんこう、管敢かんかんという者が陣を脱して匈奴の軍に亡にげ降くだった。かつて長安都下の悪少年だった男だが、前夜斥候上せつこうの手拔かりについて校尉こうい・成安侯韓延年せいあんこうかんえんねんのために衆人の前で面罵めんばされ、笞打むちたれた。それを含んでこの挙に出たのである。先日溪間たにまで斬ざんに遭った女どもの一人が彼の妻だったとも言ふ。管

敢は匈奴の捕虜の自供した言葉を知っていた。それゆえ、胡陣こじんに亡にげて单于ぜんうの前に引出されるや、伏兵を懼おそれて引上げる必要のないことを力説した。言う、漢軍には後援がない。矢もほとんど尽きようとしている。負傷者も続出して行軍は難渋なんじゆうを極めている。漢軍の中心をなすものは、李將軍りおよび成安侯韓延年の率いる各八百人だが、それぞれ黄と白との幟しをもつて印としているゆえ、明日胡騎こきの精銳をしてそこに攻撃を集中せしめてこれを破つたなら、他は容易に潰滅かいめつするであらう、云々うんぬん。单于ぜんうは大いに喜んで厚く敢を遇し、ただ

ちに北方への引上げ命令を取消した。

翌日、李陵韓延年りりようかんえんねんすみや速すみやかに降くだれと疾呼しつこしつつ、胡軍の

最精銳は、黄白の幟しを目ざして襲いかかった。その勢

いに漢軍は、しだいに平地から西方の山地へと押され

て行く。ついに本道から遙はるかに離れた山谷の間に追込

まれてしまった。四方の山上から敵は矢を雨のごとく

に注そそいだ。それに応戦しようにも、今や矢が完全に尽

きてしまった。遮虜鄣しやりよしやうを出るとき各人が百本ずつ携え

た五十万本の矢がことごとく射尽くされたのである。

矢ばかりではない。全軍の刀槍矛戟とうそうぼうげきの類も半ばは折れ

欠けてしまった。文字どおり刀折れ矢尽きたのである。それでも、戟ほこを失ったものは車輻しゃふくを斬きつてこれを持ち、軍吏ぐんりは尺刀せきとうを手にして防戦した。谷は奥へ進むに従つていよいよ狭せまくなる。胡卒こそつは諸所の崖がけの上から大石を投下しはじめた。矢よりもこのほうが確実に漢軍の死傷者を増加させた。死屍ししと礮石るいせきとでもはや前進も不可能になった。

その夜、李陵は小袖短衣しょうしゅうたんいの便衣べんいを着け、誰もついて来るなと禁じて独り幕営の外に出た。月が山の峽かいから覗のぞいて谷間に堆い屍うずたかしかばねを照らした。浚稽山しゅんけいざんの陣を撤する

ときは夜が暗かつたのに、またも月が明るくなりはじめたのである。月光と満地の霜とで片岡かたおかの斜面は水に濡ぬれたように見えた。幕営の中に残つた将士は、李陵の服装からして、彼が單身敵陣を窺うかがつてあわよくば單于と刺違える所存に違いないことを察した。李陵はなかなか戻つて来なかつた。彼らは息をひそめてしばらく外の様子を窺うかがつた。遠く山上の敵壘から胡笳こかの聲が響く。かなり久しくたつてから、音もなく帷とばりをかかげて李陵が幕の内にはいつて来た。だめだ。と一言吐き出すように言うと、踞牀きよしように腰を下おろした。全軍斬死ざんしの

ほか、途みちはないようだなと、またしばらくしてから、誰に向かつてともなく言つた。満座口を開く者はない。ややあつて軍吏ぐんりの一人が口を切り、先年浞野侯趙破奴さくやこうちようはどが胡軍こぐんのために生擒いけどられ、数年後に漢に亡にげ歸つたときも、武帝はこれを罰しなかつたことを語つた。この例から考えても、寡兵かへいをもつて、かくまで匈奴きようどを震駭しんがいさせた李陵りりようであつてみれば、たとえ都へのがれ歸つても、天子はこれに遇みちする途を知りたもうであらうといふのである。李陵はそれを遮さえぎつて言う。陵一個のことはしばらく措おけ、とにかく、今数十矢もあれば一応

は囲みを脱出することもできようが、一本の矢もない
この有様では、明日の天明には全軍が坐して縛を受け
るばかり。ただ、今夜のうちに囲みを突いて外に出、
各自鳥獸と散じて走つたならば、その中にはあるいは
辺塞に辿りついて、天子に軍状を報告しうる者もある
かもしれぬ。案ずるに現在の地点は鞬汗山北方の山地
に違いなく、居延まではなお数日の行程ゆえ、成否の
ほどはおぼつかないが、ともかく今となつては、その
ほかに残された途はないではないか。諸將僚もこれに
頷いた。全軍の将卒に各二升の糒と一個の冰片とが頒

たれ、遮しや二無二、遮虜鄣しやりよしょうに向かつて走るべき旨がふくめられた。さて、一方、ことごとく漢陣の旌旗せいぎを倒しこれを斬きつて地中に埋めたのち、武器兵車等の敵に利用されうる惧おそれのあるものも皆打毀うちこわした。夜半、鼓こして兵を起こした。軍鼓ぐんこの音も慘さんとして響かぬ。李陵は韓校尉かんこういとともに馬に跨またがり壮士十余人を従えて先登せんとうに立つた。この日追い込まれた峡谷きやうくの東の口を破つて平地に出、それから南へ向けて走ろうというのである。

早い月はすでに落ちた。胡虜こりよの不意を衝ついて、ともかくも全軍の三分の二は予定どおり峡谷の裏口を突破

した。しかしすぐに敵の騎馬兵の追撃に遭^あつた。徒歩の兵は大部分討たれあるいは捕えられたようだったが、混戦に乗じて敵の馬を奪つた数十人は、その胡馬^{こば}に鞭^{むち}うって南方へ走つた。敵の追撃をふり切つて夜目にもぼつと白い平沙^{へいさ}の上を、のがれ去つた部下の数を数えて、確かに百に余ることを確かめうると、李陵^{りりよう}はまた峡谷の入口の修羅場^{しゆらば}にとつて返した。身には数創を帯び、自らの血と返り血とで、戎衣^{じゆうい}は重く濡^ぬれていた。彼と並んでいた韓延年^{かんえんねん}はすでに討たれて戦死していた。麾下^{きか}を失い全軍を失つて、もはや天子に見ゆべき面目

はない。彼は戟ほこを取直すと、ふたたび乱軍の中に駈入かけいった。暗い中で敵味方も分らぬほどの乱闘のうちに、李陵の馬が流矢ながれやに当たったとみえてガツクリ前にのめった。それとどちらが早かったか、前なる敵を突こうと戈ほこを引いた李陵は、突然背後から重量のある打撃を後頭部に喰くらつて失神した。馬から顛落てんらくした彼の上に、生擒いけどろうと構えた胡兵こへいどもが十重とえ二十重はたえとおり重なつて、とびかかった。

二

九月に北へ立つた五千の漢軍かんぐんは、十一月にはいつて、
疲れ傷ついて將を失った四百足らずの敗兵となつて
辺塞へんさいに辿りついた。敗報はただちに驛伝えきでんをもつて長安ちやうあん
の都に達した。

武帝ぶていは思ひのほか腹を立てなかつた。本軍たる
李広利りこうりの大軍さえ惨敗さんぱいしているのに、一支隊たる李陵
の寡軍かぐんにたいした期待のもてよう道理がなかつたから。

それに彼は、李陵が必ずや戦死しているに違いないとも思っていたのである。ただ、先ごろ李陵の使いとして漠北から「戦線異状なし、士気すこぶる旺盛」の報をぼくぼくもたらした陳歩楽ちんぽらくだけは（彼は吉報の使者として嘉せられ郎ろうとなつてそのまま都に留とどまつていた）成行上どうしても自殺しなければならなかった。哀れではあつたが、これはやむを得ない。

翌、天漢三年てんかんの春になつて、李陵は戦死したのではない。捕えられて虜ろに降つたのだという確報が届いた。武帝ははじめて嚇怒かくどした。即位後四十余年。帝はすで

に六十に近かったが、氣象の烈しきは壮時に超えてい
る。神仙しんせんの説を好み方士巫覡ほうしふげきの類を信じた彼は、それ
までに己おのれの絶対おのれに尊信する方士どもに幾度か欺あざむかれて
いた。漢の勢威の絶頂に当たつて五十余年の間君臨し
たこの大皇帝は、その中年以後ずっと、靈魂の世界へ
の不安な関心に執拗しつようにつきまとわれていた。それだけ
に、その方面での失望は彼にとつて大きな打撃となつ
た。こうした打撃は、生来闊達かつたつだった彼の心に、年と
ともに群臣への暗い猜疑さいぎを植えつけていった。李蔡りさい・
青霍せいかく・趙周ちようしゆうと、丞相たる者は相ついで死罪に行なわれ

た。現在の丞相たる公孫賀こうそんがのごとき、命を拝したときに己おのが運命を恐れて帝の前で手離しで泣出したほどである。硬骨漢汲黯こうこつかんきゅうあんが退いた後は、帝を取巻くものは、佞臣ねいしんにあらずんば酷吏こくりであつた。

さて、武帝は諸重臣を召して李陵の処置について計つた。李陵の身体は都にはないが、その罪の決定によつて、彼の妻子眷属家財などの処分が行なわれるのである。酷吏として聞こえた一廷尉ていいが常に帝の顔色を窺うかがひ合法的に法を枉まげて帝の意を迎えることに巧みであつた。ある人が法の權威を説いてこれを詰なつたとこ

ろ、これに答えていう。前主の是とするとところこれが
 律となり、後主の是とするとところこれが令となる。当
 時の君主の意のほかになんの法があるうぞと。群臣皆
 この廷尉の類であつた。丞相公孫賀、御史大夫杜周、
 太常、趙弟以下、誰一人として、帝の震怒を犯してま
 で陵のために弁じようとする者はない。口を極めて彼
 らは李陵の売国的行為を罵る。陵のごとき変節漢と肩
 を比べて朝に仕えていたことを思うといまさらながら
 愧ずかしいと言出した。平生の陵の行為の一つ一つが
 すべて疑わしかつたことに意見が一致した。陵の従弟

に当たる李敢りかんが太子の寵ちゆうを頼んで驕恣きようしであることまでが、陵への誹謗ひぼうの種子になった。口を緘かんして意見を洩もらさぬ者が、結局陵に対して最大の好意を有もつものだった。それも数えるほどしかない。

ただ一人、苦々しい顔をしてこれらを見守っている男がいた。今口を極めて李陵を讒誣ざんぶしているのは、数か月前李陵が都を辞するときさかずきに盃さかずきをあげて、その行を壮さかんにした連中ではなかったか。漠北ぼくほくからの使者が来て李陵の軍の健在を伝えたとき、さすがは名将李広りこうの孫と李陵の孤軍奮闘を讃たたえたのもまた同じ連中ではな

いのか。恬^{てん}として既往を忘れたふりのできる顯官^{けんかん}連や、
彼らの諂諛^{てんゆ}を見破るほどに聡明^{そうめい}ではありながらなお真
実に耳を傾けることを嫌^{きら}う君主が、この男には不思議
に思われた。いや、不思議ではない。人間がそういう
ものとは昔からいやになるほど知ってはいるのだが、
それにしてもその不愉快さに変わりはないのである。
下大夫^{かたいふ}の一人として朝^{ちよう}につらなっていたために彼もま
た下問を受けた。そのとき、この男はハッキリと李陵
を褒^ほめ上げた。言う。陵の平生を見るに、親に事^{つか}えて
孝、士と交わって信、常に奮って身を顧みずもって国

家の急に殉ずるは誠に国士こくしのふうありというべく、今不幸にして事一度破れたが、身を全うし妻子を保んずることをのみただ念願とする君側の佞人ねいじんばらが、この陵の一失を取上げてこれを誇大歪曲わいきよくしもつて上の聡明を蔽おおおうとしているのは、遺憾いかんこの上もない。そもそも陵の今回の軍たる、五千にも満たぬ歩卒を率いて深く敵地に入り、匈奴数万の師を奔命ほんめいに疲れしめ、転戦千里、矢尽き道窮きわまるに至るもなお全軍空弩くうどを張り、白刃はくじんを冒して死闘している。部下の心を得てこれに死力を尽くさしむること、古の名将といえどもこれには

過ぎまい。軍敗れたりとはいえ、その善戦のあととはまさに天下に顕彰するに足る。思うに、彼が死せずして虜に降つた^{くだ}というのも、ひそかにかの地にあつて何事か漢に報いんと期してのことではあるまいか。……

並いる群臣は驚いた。こんなことのいえる男が世に
いようとは考えなかつたからである。彼らはこめかみを
顫^{ふる}わせた武帝の顔を恐る恐る見上げた。それから、
自分らをあえて全軀保妻子の臣と呼んだこの男を待
つものが何であるかを考えて、ニヤリとするのである。

向こう見ずなその男——太史令・司馬遷^{たいしれい しばせん}が君前を退

くと、すぐに、「全軀保妻子の臣」の一人が、遷せんと
りよう李陵との親しい関係について武帝の耳に入れた。太史
令は故ゆえあつて忒師將軍じしと隙げきあり、遷が陵を褒ほめるのは、
それによつて、今度、陵に先立つて出塞しゆつさいして功のな
かつた忒師將軍を陥おとしれんがためであると言う者も出て
きた。ともかくも、たかが星曆せいれき卜祀ぼくしを司つかさどるにすぎぬ太
史令の身として、あまりにも不遜ふそんな態度だというのが、
一同の一致した意見である。おかしなことに、李陵の
家族よりも司馬遷のほうが先に罪せられることになつ
た。翌日、彼は廷尉ていゐに下された。刑は宮きゆうと決まつた。

支那しなで昔から行なわれた肉刑にくけいの主なるものとして、
黥けい、劓ぎ（はなきる）、剕ひ（あしきる）、宮きゆうの四つがある。
武帝の祖父・文帝ぶんていのとき、この四つのうち三つまでは
廃せられたが、宮刑きゆうけいのみはそのまま残された。宮刑と
はもちろん、男を男でなくする奇怪な刑罰である。こ
れを一に腐刑ふけいともいうのは、その創きずが腐臭を放つがゆ
えだともいい、あるいは、腐木ふぼくの実を生ぜざるがごと
き男と成り果てるからだともいう。この刑を受けた者
を閹人えんじんと称し、宮廷の宦官かんがんの大部分がこれであつたこ
とは言うまでもない。人もあろうに司馬遷しばせんがこの刑に

遭つたのである。しかし、後代の我々が史記しきの作者として知っている司馬遷は大きな名前だが、当時の太史令たいしれい司馬遷は眇びょうたる一文筆の吏りにすぎない。頭腦めいせきの明晰なことは確かとしてもその頭腦に自信をもちすぎた、人づき合いの悪い男、議論においてけつして他人ひとに負けない男、たかだか強情我慢の偏窟人へんくつじんとしてしか知られていなかった。彼が腐刑ふけいに遇あつたからとて別に驚く者はない。

司馬氏は元周もとしゅうの史官であつた。後、晋しんに入り、秦しんに仕え、漢かんの代となつてから四代目の司馬談しばたんが武帝に仕

えて建元年間けんげんに太史令たいしれいをつとめた。この談が遷の父である。専門たる律りつ・曆れき・易えきのほかきに道家どうかの教えに精くわしくまた博ひろく儒じゆ、墨ぼく、法ほう、名めい、諸家しよかの説にも通じていたが、それらをすべて一家の見けんをもつて綜すべて自己のものとしていた。己おのれの頭脳や精神力についての自信の強さはそつくりそのまま息子むすこの遷うけつに受嗣うけつがれたところのものである。彼が、息子に施した最大の教育は、諸学の伝授を終えてのちに、海内かいだいの大旅行をさせたことであつた。当時としては変わった教育法であつたが、これが後年の歴史家司馬遷に資するところのすこぶる大で

あつたことは、いうまでもない。

元封元年^{げんぽう}に武帝が東、泰山^{たいざん}に登つて天を祭つたとき、
たまたま周南^{しゅうなん}で病床にあつた熱血漢司馬談^{ねつけつかんしばたん}は、天子始
めて漢家の封^{ほう}を建つるめでたきときに、己^{おのれ}一人従つて
ゆくことのできぬのを慨^{なげ}き、憤を発してそのために死
んだ。古今を一貫せる通史^{つうし}の編述こそは彼の一生の念
願だつたのだが、単に材料の蒐集^{しゅうしゅう}のみで終わつてし
まったのである。その臨終^{りんじゅう}の光景は息子・遷^{せん}の筆に
よつて詳しく史記^{しき}の最後の章に描かれている。それに
よると司馬談は己のまた起^たちがたきを知るや遷を呼び

その手を執とつて、懇ねんごろに修史しゅうしの必要を説き、己おのれたいしなりながらこのことに着手せず、賢君忠臣の事蹟じせきを空むなしく地下に埋なめしめる不甲斐ふがいなさを慨なげいて泣いた。
「予よ死せば汝なんじ必ず太史とならん。太史とならばわが論著せんと欲するところを忘るるなかれ」といい、これこそ己に対する孝の最大なものだとして、爾なんじそれ念おもえやと繰返したとき、遷は俯首流涕ふしゅうりゅうていしてその命に背そむかざるべきを誓つたのである。

父が死んでから二年ののち、はたして、司馬遷しばせんは太史令たいしれいの職を継いだ。父の蒐集しゅうしゅうした資料と、宮廷所蔵

の秘冊とを用いて、すぐにも父子相伝ふしそうでんの天職にとりかかりたかつたのだが、任官後の彼にまず課せられたのは暦の改正という事業であつた。この仕事に没頭することちやうど満四年。たいしよ太初元年にようやくこれを仕上げると、すぐに彼は史記しきの編纂へんさんに着手した。遷、ときに年四十二。

腹案はとうにでき上がっていた。その腹案による史書の形式は従来の史書のどれにも似ていなかつた。彼は道義的批判の規準を示すものとしては春秋しゆんじゆうを推したが、事実を伝える史書としてはなんとしてもあきたら

なかつた。もつと事実が欲しい。教訓よりも事実が。
左伝さでんや国語こくごになると、なるほど事実はある。左伝の叙
事の巧妙さに至つては感嘆のほかはない。しかし、そ
の事実を作り上げる一人一人の人についての探求がな
い。事件の中における彼らの姿の描出は鮮あざやかであつ
ても、そうしたことをしでかすまでに至る彼ら一人一
人の身許調みもとべの欠けているのが、司馬遷しばせんには不服だつ
た。それに従来の史書はすべて、当代の者に既往をし
らしめることが主眼となつていて、未来の者に当代を
知らしめるためのものとしての用意があまりに欠けす

ぎているようである。要するに、司馬遷の欲するものは、在来の史には求めて得られなかった。どういふ点で在来の史書があきたらぬかは、彼自身でも自ら欲するところを書上げてみてはじめて判然する底ていのものと思われた。彼の胸中にあるモヤモヤと鬱積うっせきしたものを書き現わすことの要求のほうで、在来の史書に対する批判より先に立つた。いや、彼の批判は、自ら新しいものを創つくるといふ形でしか現われないのである。自分が長い間頭の中で画えがいてきた構想が、史といえるものか、彼には自信はなかった。しかし、史といえてもい

えなくても、とにかくそういうものが最も書かれなければならぬものだ（世人にとって、後代にとって、な
かんずく己自身にとつて）という点については、自信
があつた。彼も孔子に倣つて、述べて作らぬ方針を
とつたが、しかし、孔子のそれとはたぶん内容（こと）を異
にした述而不作である、司馬遷にとつて、単なる編年
体の事件列挙はいまだ「述べる」の中にはいらぬもの
だつたし、また、後世人の事実そのものを知ることが
妨げるような、あまりにも道義的な断案は、むしろ「作
る」の部類にはいるように思われた。

漢が天下を定めてからすでに五代・百年、始皇帝の反文化政策によつて湮滅いんめつしあるいは隠匿いんとくされていた書物がようやく世に行なわれはじめ、文の興おこらんとする氣運が鬱勃うつぼつとして感じられた。漢の朝廷ばかりでなく、時代が、史の出現を要求しているときであつた。司馬遷しばせん個人としては、父の遺囑いしよくによる感激が学殖・觀察・筆力の充実を伴つてようやく渾然こんぜんたるものを生み出すべく醞酵はっこうしかけてきていた。彼の仕事は実に氣持よく進んだ。むしろ快調に行きすぎて困るくらいであつた。というのは、初めの五帝本紀ごていほんぎから夏殷周秦本

紀あたりまでは、彼も、材料を按排あんばいして記述の正確厳密を期する一人の技師に過ぎなかつたのだが、始皇帝を経て、項羽こうう本紀にはいるころから、その技術家の冷静さが怪しくなつてきた。ともすれば、項羽が彼に、あるいは彼が項羽にのり移りかねないのである。

項王則すなわち夜起キテ帳中ニ飲ス。美人有リ。名ハ虞ぐ。

常ニ幸セラレテ従フ。駿馬しゅんめ名ハ騅すい、常ニ之これニ騎ス。是ここ

ニ於テ項王乃すなわち悲歌慷慨シ自ラ詩ヲ為リテ曰ク「力山

ヲ抜キ氣世ヲ蓋フ、時利アラズ騅逝カズ、騅逝カズ

奈何スベキ、虞ヤ虞ヤ若なんじヲ奈何ニセン」ト。歌フコト

数^{けつ}關、美人之ニ和ス。項王泣^{なみだ}数行下ル。左右皆泣キ、能^よク仰ギ視^みルモノ莫^なシ……。

これでいいのか？ と司馬遷は疑う。こんな熱に浮かされたような書きっぷりでいいものだろうか？ 彼は「作ル」ことを極度に警戒した。自分の仕事は「述ベル」ことに尽きる。事実、彼は述べただけであつた。しかしなんと生氣^{はつらつ}澆刺たる述べ方であつたか？ 異常な想像的視覚を有^もつた者でなければとうてい不能な記述であつた。彼は、ときに「作ル」ことを恐れるのあまり、すでに書いた部分を読返してみても、それあるがた

めに史上の人物が現実の人物のごとくに躍動すると思
われる字句を削る。すると確かにその人物はハツラツ
たる呼吸を止める^や。これで、「作ル」ことになる心配は
ないわけである。しかし、（と司馬遷が思うに）これ
は項羽^{こうう}が項羽でなくなるではないか。項羽も始皇帝^{しこうてい}も
楚^その莊王^{そうおう}もみな同じ人間になつてしまふ。違つた人間
を同じ人間として記述することが、何が「述べる」だ？
「述べる」とは、違つた人間は違つた人間として述べ
ることではないか。そう考えてくると、やはり彼は
削つた字句をふたたび生かさないわけにはいかない。

元どおりに直して、さて一読してみて、彼はやつと落ちつく。いや、彼ばかりではない。そこにかかれた史上の人物が、項羽や樊噲はんかいや范增はんぞうが、みんなようやく安心してそれぞれの場所に落ちつくように思われる。

調子のよいときの武帝ぶていは誠に高邁闊達こうまいかつたつな・理解ある文教の保護者だったし、太史令たいしれいという職が地味な特殊な技能を要するものだったために、官界につきものの朋党比周ほうとうひしゅうの擠陷讒誣せいがんざんぶによる地位（あるいは生命）の不安定からも免れることができた。

数年の間、司馬遷は充実した・幸福といつていい

日々を送った。（当時の人間の考える幸福とは、現代人のそれと、ひどく内容の違うものだったが、それを求めることに変わりはない。）妥協性はなかったが、どこまでも陽性で、よく論じよく怒りよく笑いなかんずく論敵を完膚かんぷなきまでに説破することを最も得意としていた。

さて、そうした数年ののち、突然、この禍わざわいが降くだったのである。

薄暗い蚕室さんしつの中で——腐刑施術後当分の間は風に当

たることを避けねばならぬので、中に火を熾おこして暖かに保った・密閉した暗室を作り、そこに施術後の受刑者を数日の間入れて、身体を養わせる。暖かく暗いところが蚕を飼う部屋に似ているとて、それを蚕室と名づけるのである。――言語を絶した混乱のあまり彼は茫然ぼうぜんと壁によりかかった。憤激よりも先に、驚きのようなものさえ感じていた。斬ざんに遭あうこと、死を賜たまうことに対してなら、彼にはもとより平生から覚悟ができている。刑死けいしする己おのれの姿なら想像してみることもできるし、武帝の気に逆らって李陵りりようを褒ほめ上げたときもま

かりまちがえば死を賜うようなことになるかもしれぬ
くらいの懸念けねんは自分にもあつたのである。ところが、
刑罰も数ある中で、よりによつて最も醜陋しゅうろうな宮刑きゆうけいにあ
おうとは！ 迂闊うかつといえは迂闊だが、（というのは、死
刑を予期するくらいなら当然、他のあらゆる刑罰も予
期しなければならぬわけだから）彼は自分の運命の
中に、不測の死が待受けているかもしれぬとは考えて
いたけれども、このような醜いものが突然現われよう
とは、全然、頭から考えもしなかつたのである。常々、
彼は、人間にはそれぞれその人間にふさわしい事件し

か起こらないのだという一種の確信のようなものをも有^もっていた。これは長い間史実を扱っているうちに自然に養われた考えであつた。同じ逆境にしても、慷慨の士には激しい痛烈な苦しみが、軟弱の徒^とには緩慢なじめじめした醜い苦しみが、というふうにある。たとえ始めは一見ふさわしくないように見えても、少なくともその後の対処のし方によつてその運命はその人間にふさわしいことが判^{わか}つてくるのだと。司馬遷^{しばせん}は自分を男^{おとこ}だと信じていた。文筆の吏^りではあつても当代のいかなる武人^{ぶじん}よりも男であることを確信していた。自

分でばかりではない。このことだけは、いかに彼に好意を寄せぬ者でも認めないわけにはいかないようであつた。それゆえ、彼は自らの持論に従つて、車裂くるまたぎの刑なら自分の行く手に思い画えがくことができたのである。それが齡よわい五十に近い身で、この辱はずかしめにあおうとは！

彼は、今自分が蚕室さんしつの中にいるということが夢のような気がした。夢だと思いたかつた。しかし、壁によつて閉じていた目を開くと、うす暗い中に、生氣のない・魂までが抜けたような顔をした男が三、四人、だらしなく横たわつたりすわつたりしているのが目には

いった。あの姿が、つまり今の己なのだと思つたとき、
嗚咽おえつとも怒号どごうともつかない叫びが彼の咽喉のどを破つた。

痛憤はんもんと煩悶との数日のうちには、ときに、学者とし

ての彼の習慣からくる思索が——反省が来た。いった
い、今度の出来事の中で、何が——誰が——誰のどう
いうところが、悪かつたのだという考えである。日本
の君臣道とは根柢こんていから異なつた彼のか国のこととて、当
然、彼はまず、武帝を怨うらんだ。一時はその怨懣えんまんだけで、
いつさい他を顧みる余裕はなかつたというのが實際で
あつた。しかし、しばらくの狂乱の時期の過ぎたあと

には、歴史家としての彼が、目覚めてきた。儒者^{じゅしゃ}と違つて、先王の価値にも歴史家的な割引をすることを知つていた彼は、後王たる武帝の評価の上にも、私怨^{しえん}のためには狂いを来たさせることとはなかつた。なんといつても武帝は大君主である。そのあらゆる欠点にもかかわらず、この君がある限り、漢の天下は微動^{みどう}だもしない。高祖はしばらく措^おくとするも、仁君文帝^{じんくんぶんてい}も名君景帝^{けいてい}も、この君に比べれば、やはり小さい。ただ大きいものは、その欠点までが大きく写ってくるのは、これはやむを得ない。司馬遷^{しばせん}は極度の憤怒^{ふんえん}のうちに

あつてもこのことを忘れてはいない。今度のことは要するに天の作^なせる疾風暴雨霹靂^{へきれき}に見舞われたものと思ふほかはないという考えが、彼をいつそう絶望^{いきどお}的な憤りへと駆^かつたが、また一方、逆に諦観^{ていかん}へも向かわせようとする。怨恨^{えんこん}が長く君主に向かい得ないとなると、勢い、君側の姦臣^{かんしん}に向けられる。彼らが悪い。たしかにそうだ。しかし、この悪さは、すこぶる副次的な悪さである。それに、自矜^{じきようしん}心の高い彼にとつて、彼ら小人輩^{しょうじんはい}は、怨恨の対象としてさえ物足りない気がする。彼は、今度ほど好人物というもののへの腹立ちを感じた

ことはない。これは姦臣かんしんや酷吏こくりよりも始末が悪い。少
なくとも側かたわらから見えていて腹が立つ。良心的に安つぽく
安心しており、他にも安心させるだけ、いつそう怪けし
からぬのだ。弁護もしなければ反駁はんぱくもせぬ。心中、反
省もなければ自責もない。丞相じやうしやう公孫賀こうそんがのごとき、そ
の代表的なものだ。同じ阿諛あゆ迎合げいごうを事としても、杜周としゆう
(最近この男は前任者王卿おうけいを陥おとれてまんまと御史大夫ぎよしだいふ
となりとおおせた)のような奴やつは自らそれと知っている
に違いないがこのお人好しの丞相ときた日には、その
自覚さえない。自分に全軀保妻子くをまつとうしさいしをたもつの臣といわれても、

こういう手合いは、腹も立てないのだろう。こんな手合いは恨みを向けるだけの値打ちさえもない。

司馬遷は最後に忿懣ふんまんの持つて行きどころを自分に求めようとする。実際、何ものかに対して腹を立てなければならぬとすれば、結局それは自分自身に対してのほかはなかったのである。だが、自分のどこが悪かったのか？ 李陵りりやうのために弁じたこと、これはいかに考えてみてもまちがっていたとは思えない。方法的にも格別拙まずかったとは考えぬ。阿諛あゆに墮だするに甘んじないかぎり、あれはあれでどうしようもない。それでは、

自ら顧みてやましくなければ、そのやましくない行為が、どのような結果を来たそうとも、士たる者はそれを甘受かんじゆしなければならぬはずだ。なるほどそれは一応そうに違ひない。だから自分も肢解しかいされようと腰斬ようざんにあおうと、そういうものなら甘んじて受けるつもりなのだ。しかし、この宮刑きゆうけいは——その結果かく成り果てたわが身の有様というものは、——これはまた別だ。同じ不具でも足を切られたり鼻を切られたりするのとは全然違つた種類のものだ。士たる者の加えられるべき刑ではない。こればかりは、身体のことという状態と

いうものは、どういう角度から見ても、完全な悪だ。
しよくげん

飾言の余地はない。そうして、心の傷だけならば時とともに癒えることもあろうが、己おのが身体おのれのこの醜悪な現実いは死に至るまでつづくのだ。動機がどうあろうと、このような結果を招くものは、結局「悪かった」といわなければならぬ。しかし、どこが悪かった？ 己おのれのどこが？ どこも悪くなかった。己は正しいことしかなかった。強しいていえば、ただ、「我あり」という事実だけが悪かったのである。

ぼうぜん茫然とした虚脱きょだつの状態ですわっていたかと思うと、

突然飛上り、傷ついた獣のごとくうめきながら暗く暖かい室の中を歩き廻る。^{まわ}そうしたしぐさを無意識に繰返しつつ、彼の考えもまた、いつも同じ所をぐるぐる廻つてばかりいて帰結するところを知らないのである。我を忘れ壁に頭を打ちつけて血を流したその数回を除けば、彼は自らを殺そうと試みなかった。死にたかった。死ねたらどんなによからう。それよりも数等恐ろしい恥辱が迫立てるのだから死をおそれる気持は全然なかった。なぜ死ねなかったのか？ 獄舎の中に、自らを殺すべき道具のなかったことにもよろう。しか

し、それ以外に何かが内から彼をとめる。はじめ、彼はそれがなんであるかに気づかなかつた。ただ狂乱と憤懣ふんまんとの中で、たえず発作的ほっさに死への誘惑を感じたにもかかわらず、一方彼の氣持を自殺のほうへ向けさせたがらないものがあるのを漠然ぼくぜんと感じていた。何を忘れたのかはハッキリしないながら、とにかく何か忘れたものをしたような氣のすることがある。ちようどそんなぐあいであつた。

許されて自宅に帰り、そこで謹慎きんしんするようになってから、はじめて、彼は、自分がこの一月ひと狂乱にとり紛まぎ

れて己おのが畢生ひっせいの事業たる修史しゅうしのことを忘れ果てていたこと、しかし、表面は忘れていたにもかかわらず、その仕事への無意識の関心が彼を自殺はばから阻む役目を隠々いんいんのうちにつとめていたことに気がついた。

十年前臨終りんじゆうの床で自分の手を取り泣いて遺命いめいした父そくそくの側々たる言葉は、今なお耳底じていにある。しかし、今疾痛惨怛しつづうさんたんを極きわめた彼の心の中に在あってなお修史の仕事进行しんこうを思い絶たしめないものは、その父の言葉ばかりではなかった。それは何よりも、その仕事そのものであった。仕事の魅力とか仕事への情熱とかいう怡たのしい態ていの

ものではない。修史という使命の自覚には違いないとしてもさらに昂然こうぜんとして自らを恃じする自覚ではない。恐ろしく我がの強い男だったが、今度のことで、己おのれのいかにとるに足らぬものだったかをしみじみと考えさせられた。理想の抱負のと威張いばつてみたところで、所詮しよせん己は牛にふみつぶされる道傍みちばたの虫けらのごときものになすぎなかったのだ。「我」はみじめに踏みつぶされたが、修史という仕事の意義は疑えなかった。このような浅ましい身と成り果て、自信も自恃じじも失いつくしたのち、それでもなお世にながらえてこの仕事に従うというこ

とは、どう考えても怡^{たの}しいわけはなかった。それはほとんど、いかにいとわしくとも最後までその関係を絶つことの許されない人間同士のような宿命的な因縁^{いんねん}に近いものと、彼自身には感じられた。とにかくこの仕事のために自分は自らを殺すことができぬのだ（それも義務感からではなく、もつと肉体的な、この仕事との繋^{つな}がりによつてである）ということだけはハッキリしてきた。

当座の盲目的な獣の呻^{うめ}き苦しみに代わつて、より意識的な・人間の苦しみが始まつた。困つたことに、自

殺できないことが明らかになるにつれ、自殺によつてのほかに苦悩と恥辱とから逃れる途みちのないことがますます明らかになつてきた。一個の丈夫じょうふたる太史令司馬遷たいしれいしほせんは天漢三年の春に死んだ。そして、そののちに、彼の書残した史をつづける者は、知覚も意識もない一つの書写機械にすぎぬ、——自らそう思い込む以外に途みちはなかつた。無理でも、彼はそう思おうとした。修史の仕事は必ず続けられねばならぬ。これは彼にとつて絶対であつた。修史の仕事のつづけられるためには、いかにたえがたくとも生きながらえねばな

らぬ。生きながらえるためには、どうしても、完全に身を亡なきものと思ひ込む必要があつたのである。

五月いつののち、司馬遷はふたたび筆を執とつた。歎よろこびも昂こうふん奮もない・ただ仕事の完成への意志だけに鞭打むちうたれて、傷ついた脚を引摺ひきずりながら目的地へ向かう旅人のように、とぼとぼと稿を継いでいく。もはや太史令の役は免ぜられていた。些ちやか後悔した武帝が、しばらく後に彼を中書令ちゆうしやうれいに取立てたが、官職の黜陟ちゆうつちやくのごときは、彼にとつてもうなんの意味もない。以前の論客司馬遷は、一切口を開かずなつた。笑うことも怒ることもな

い。しかし、けっして悄然^{しょうぜん}たる姿ではなかった。むしろ、何か悪霊^{あくりょう}にでも取り憑^つかれているようなすさまじさを、人々は緘黙^{かんもく}せる彼の風貌^{ふうぼう}の中に見て取った。夜眠る時間をも惜しんで彼は仕事をつづけた。一刻も早く仕事を完成し、そのうえで早く自殺の自由を得たいとあせっているもののように、家人らには思われた。

凄惨^{せいさん}な努力を一年ばかり続けたのち、ようやく、生きることの歓び^{よろこ}を失いつくしたのちもなお表現することの歓びだけは生残りうるものだということを、彼は発見した。しかし、そのころになってもまだ、彼の完

全な沈黙は破られなかつたし、風貌ふうぼうの中のすさまじさも全然和やわらげられはしない。稿をつづけていくうちに、宦者かんじやとか閹奴えんどとかいう文字を書かなければならぬところに来ると、彼は覚えず呻うめき声を発した。独り居室にいるときでも、夜、牀上しょうじょうに横になつたときでも、ふとこの屈辱の思いが萌もしてくると、たちまちカーツと、焼鑊やきごてをあてられるような熱い疼うずくものが全身を駈かけめぐる。彼は思わず飛上り、奇声を発し、呻きつつ四辺あたりを歩きまわり、さてしばらくしてから齒をくいしばつて己おのれを落ちつけようと努めるのである。

三

乱軍の中に氣を失つた李陵が獸脂じゅうしを灯ともし獸糞じゅうふんを焚たいた單于ぜんうの帳房ちやうぼうの中で目を覺さましたとき、咄嗟とつさに彼は心を決めた。自ら首刎みづかねて辱はしめを免れるか、それとも今一応は敵に従つておいてそのうちに機みを見て脱走する——敗軍の責を償つぐなうに足る手柄みやげを土産として——か、この二つのほかに途みちはないのだが、李陵は、後者を選ぶことに心を決めたのである。

单于ぜんうは手ずから李陵の縄なわを解いた。その後の待遇も
ていちょう

鄭重を極めた。且鞮侯单于そていこうとて先代の响犁湖单于くりにこの弟

だが、骨骼こつかくの逞たくましい巨眼赭髯きよがんしやぜんの中年の偉丈夫いじょうふである。

数代の单于に従つて漢かんと戦つてはきたが、まだ李陵ほ

どの手強い敵てごわに遭あつたことはないと正直に語り、陵の

祖父李広りこうの名を引合りいに出して陵の善戦を讃ほめた。虎とら

を格殺かくさつしたり岩に矢を立てたりした飛將軍李広ひしやうぐんの驍名きやうめい

は今もなお胡地こちにまで語り伝えられている。陵が厚遇

を受けるのは、彼が強き者の子孫でありまた彼自身も

強かつたからである。食を頒わけるときも強壯者が美味

をとり老弱者に余り物を与えるのが匈奴きょうどのふうであつた。ここでは、強き者が辱はづかしめられることはけつしてない。降将李陵は一つの穹廬きゆうろと数十人の侍者じしやとを与えるひんきやくられ賓客の礼をもつて遇ぐうせられた。

李陵にとって奇異な生活が始まつた。家は

絨帳じゆうちやう穹廬きゆうろ、食物じゆうちやうは羶肉せんにく、飲物らんくしやうは酪漿らくしやうと獸乳じゆうにきと乳醋酒にゆうさくしゆ。

着物おおかみは狼おおかみや羊くまや熊くまの皮くまを綴つづり合あわせた旃裘せんきゆう。牧畜ぼくしゆと狩い

獵こうりやくと寇掠こうりやくと、このほかに彼らの生活はない。一望いちぼう際涯さいがい

のない高原こうげんにも、しかし、河や湖や山々さんざんによる境界けいがいが

あつて、单于ぜんう直轄地ちやくかくちのほかは左賢王さけんおう右賢王ぎけんおう左谷蠡王さろくりおう右

谷蠡王以下の諸王侯の領地に分けられており、牧民の移住はおのおのその境界の中に限られているのである。城郭もなければ田畑もない国。村落はあつても、それが季節に従い水草を逐つて土地を変える。

李陵には土地は与えられない。单于麾下きかの諸将とともにいつも单于に従っていた。隙すきがあつたら单于の首でも、と李陵は狙ねらっていたが、容易に機会が来ない。たとい、单于を討果たしたとしても、その首を持って脱出することは、非常な機会に恵まれないかぎり、まづ不可能であつた。胡地こちにあつて单于と刺違えたので

は、匈奴きょうどは己おのれの不名誉を有う耶無耶やむやのうちに葬うつてしま
うこと必定ひつじようゆえ、おそらく漢に聞こえることはあるま
い。李陵は辛抱しんぼうづよ強く、その不可能とも思われる機会の
到来を待った。

单于ぜんうの幕下ぼつかには、李陵りりようのほかにも漢の降人こうじんが幾人か
いた。その中の一人、衛律えいりつという男は軍人ではなかつ
たが、丁靈王ていれいおうの位を貰もらつて最も重く单于に用いられて
いる。その父は胡人こじんだが、故ゆえあつて衛律は漢の都で生
まれ成長した。武帝に仕えていたのだが、先年
協律都尉きやうりつと李延年りえんねんの事に坐ざするのを懼おそれて、亡にげて匈奴きょうど

に帰きしたのである。血が血だけに胡風こふうになじむことも速く、相当の才物でもあり、常に且鞮侯单于そていこうぜんうの帷幄いあくに参じてすべての画策えさくに与あずかっていた。李陵はこの衛律を始め、漢人かんじんの降くだつて匈奴の中にあるものと、ほとんど口をきかなかつた。彼の頭の中にある計画について事をともにすべき人物がいなと思われたのである。そういえば、他の漢人同士の間でもまた、互いに妙に気まずいものを感じるらしく、相互に親しく交わることがないようであつた。

一度单于是李陵を呼んで軍略上の示教を乞こうたこと

がある。それは東胡とうこに対しての戦いだつたので、陵は快く己おのが意見を述べた。次に单于が同じような相談を持ちかけたとき、それは漢軍に対する策戦についてであつた。李陵はハッキリと嫌いやな表情をしたまま口を開こうとしなかつた。单于も強しいて返答を求めようとしなかつた。それからだいぶ久しくたつたころ、代・上郡を寇掠こうりやくする軍隊の一将として南行することを求められた。このときは、漢に対する戦いには出られない旨を言つてキツパリ断わつた。爾後じご、单于は陵にふたたびこうした要求をしなくなつた。待遇は依然として変

わらない。他に利用する目的はなく、ただ士を遇するために士を遇しているのだとしか思われない。とにかくこの单于是男おとこだと李陵は感じた。

单于の長子・左賢王さけんおうが妙に李陵に好意を示しはじめた。好意というより尊敬といったほうが近い。二十歳を越したばかりの・粗野そやではあるが勇氣のある真面目まじめな青年である。強き者への讃美さんびが、実に純粹で強烈なのだ。初め李陵のところへ来て騎射きしやを教えてくれという。騎射といっても騎のほうは陵に劣らぬほど巧うまい。ことに、裸馬らばを駆る技術に至っては遙はるかに陵を凌しのいで

いるので、李陵はただ射しやだけを教えることにした。

さけんおう

左賢王は、熱心な弟子となつた。陵の祖父李広りこうの射に

にゆうしん

おける入神の技などを語るとき、蕃族ばんぞくの青年は眸ひとみをか

がやかせて熱心に聞入るのである。よく二人して狩獵

に出かけた。ほんの僅わずかの供廻ともまわりを連れただけで二人

こうや

は縦横に曠野こうやを疾駆しつくしては狐や狼や羚羊きつね おおかみや鷗かもしかや雉子おとりな

どを射た。あるときなど夕暮れ近くなつて矢も尽きか

けた二人が——二人の馬は供の者を遙はるかに駢かけぬ抜いてい

たので——一群の狼に囲まれたことがある。馬に鞭むちう

ち全速力で狼群の中を駢はけ抜けて逃れたが、そのとき、

李陵の馬の尻しりに飛びかかった一匹を、後ろに駈けていた青年左賢王が彎刀わんとうをもつて見事みごとに胴斬どうぎりにした。あとで調べると二人の馬は狼どもに噛かみ裂かれて血だらけになっていた。そういう一日のち、夜、天幕てんまくの中で今日の獲物を羹あつものの中にぶちこんでフウフウ吹きながら啜すするとき、李陵は火影ほかげに顔を火照ほてらせた若い蕃王ばんおうの息子に、ふと友情のようなものをさえ感じるこゝろがあつた。

天漢三年の秋に匈奴きょうどがまたもや雁門がんもんを犯した。これ

に酬むくいるとて、翌四年、漢は貳師將軍李広利りこうりに騎六万歩七万の大軍を授けて朔方さくほうを出でしめ、歩卒一万を率いた強弩都尉路博德きやうぶとゐろはくとくにこれを援けしめた。ひいて因杆いんかう將軍公孫敖こうそんごうは騎一万歩三万をもつて雁門を、游擊將軍ゆうげき韓説かんせつは歩三万をもつて五原ごげんを、それぞれ進発する。近來きんらいにない大北伐ほくぱつである。单于ぜんうはこの報に接するや、ただちに婦女、老幼、畜群、資財の類をことごとくみづか余吾水しよごすい（ケルレン河）北方の地に移し、自ら十万の精騎を率いて李広利・路博德りこうりの軍を水南すいなんの大草原に邀えむか撃つた。連戦十余日。漢軍はついに退くのをやむなきに

至つた。李陵りりように師事する若き左賢王さけんおうは、別に一隊を率いて東方に向かい因杆いんこう將軍を迎えてさんざんにこれを破つた。漢軍の左翼たる韓說かんせつの軍もまた得るところなくして兵を引いた。北征は完全な失敗である。李陵は例によつて漢との戦いには陣頭に現われず、水北に退いていたが、左賢王の戦績をひそかに氣遣きづかつて己おのれを発見して愕然がくぜんとした。もちろん、全体としては漢軍の成功と匈奴きようどの敗戦とを望んでいたには違いないが、どうやら左賢王だけは何か負けさせたくないと感じていたらしい。李陵はこれに氣がついて激しく己を責め

た。

その左賢王に打破られた公孫敖こうそんごうが都に帰り、士卒を多く失つて功がなかったとの廉かどで牢ろうに繋つながれたとき、妙な弁解をした。敵の捕虜ほりよが、匈奴軍の強いのは、漢から降くだつた李將軍りが常々兵を練り軍略を授けてもつて漢軍に備えさせているからだと言つたというのである。だからといって自軍が敗まけたことの弁解にはならないから、もちろん、因杆將軍いんかうの罪は許されなかったが、これを聞いた武帝が、李陵に対し激怒したことは言うまでもない。一度許されて家に戻っていた陵の一族は

ふたたび獄ごくに収められ、今度は、陵の老母から妻・子弟に至るまでことごとく殺された。軽薄なる世人の常として、当時隴西ろうせい（李陵の家は隴西の出である）の士大夫したいふら皆李家を出したことを恥としたと記されている。

この知らせが李陵の耳に入つたのは半年ほど後のこと、辺境から拉致らちされた一漢卒かんそつの口からである。それを聞いたとき、李陵は立上がつてその男の胸倉むなぐらをつかみ、荒々しくゆすぶりながら、事の真偽を今一度たしかめた。たしかにまちがいのないことを知ると、彼は齒をくい縛りしば、思わず力を両手にこめた。男は身をも

がいて、苦悶くもんの呻うめきを洩もらした。陵りょうの手が無意識のうちにその男の咽喉いんこうを扼やくしていたのである。陵が手を離すと、男はバツタリ地に倒れた。その姿に目もやらず、陵は帳房ちやうぼうの外へ飛出した。

めちやくちやに彼は野を歩いた。激しい憤りが頭の中で渦うずを巻いた。老母や幼児のことを考えると心は灼やけるようであつたが、涙は一滴も出ない。あまりに強い怒りは涙を涸渴こかつさせてしまうのであろう。

今度の場合には限らぬ。今まで我が一家はそもそも漢から、どのような扱いを受けてきたか？ 彼は祖父

の李広りこうの最期さいごを思つた。（陵りょうの父、当戸とうこは、彼が生まれる数か月前に死んだ。陵はいわゆる、遺腹の児である。だから、少年時代までの彼を教育し鍛えあげたのは、有名なこの祖父であつた。）名將李広は数次の北征に大功を樹たてながら、君側の姦佞かんねいに妨げられて何一つ恩賞にあずからなかつた。部下の諸將がつぎつぎに爵位封侯しやくいほうこうを得て行くのに、廉潔れんけつな將軍だけは封侯はおろか、終始変わらぬ清貧せいひんに甘んじなければならなかつた。最後に彼は大將軍衛青えいせいと衝突した。さすがに衛青にはこの老將をいたわる気持はあつたのだが、その

幕下ぼっかの一軍吏ぐんりが虎とらの威いを借りて李広りかんを辱はづかしめた。憤激みずかした老名將はすぐその場で——陣營みずかの中で自ら首刎はねたのである。祖父の死を聞いて声をあげてない少年の日の自分を、陵はいまだにハッキリと憶おぼえている。
……

陵の叔父（李広りかんの次男）李敢りかんの最後はどうか。彼は父將軍の慘みじめな死について衛青えいせいを怨うらみ、自ら大將軍の邸おもむに赴おもむいてこれを辱はづかしめた。大將軍の甥おいにあたる嫫ひょうき騎將軍霍去病かくきよへいがそれを憤かんせんきゆうつて、甘泉宮かんせんきゆうの獵おのときに李敢を射殺した。武帝はそれを知りながら、嫫騎將軍をか

ばわんがために、李敢は鹿しかの角に触れて死んだと発表させたのだ。……。

司馬遷しほせんの場合と違つて、李陵のほうは簡単であつた。憤怒ふんぬがすべてであつた。（無理でも、もう少し早くかねての計画——单于ぜんうの首でも持つて胡地こちを脱するという——を実行すればよかつたという悔いを除いては）ただそれをいかにして現わすかが問題であるにすぎない。彼は先刻の男の言葉「胡地こちにあつて李將軍が兵を教え漢に備えていると聞いて陛下が激怒され云々うんぬん」を思出した。ようやく思い当たつたのである。もちろん

彼自身にはそんな覚えはないが、同じ漢の降将に李緒りしよという者がある。元、塞外都尉さいがいといとして奚侯城けいこうじょうを守つていた男だが、これが匈奴きやうどに降つてから常に胡軍こぐんに軍略を授け兵を練つてゐる。現に半年前の軍にも、单于に従つて、（問題の公孫敖こうそんごうの軍とではないが）漢軍と戦つてゐる。これだと李陵りりようは思つた。同じ李將軍りで、李緒りしよとまちがえられたに違ひないのである。

その晩、彼は单身、李緒の帳幕ちやうぼくへと赴おもむいた。一言も言わぬ、一言も言わせぬ。ただの一刺しで李緒は斃たおれた。

翌朝李陵は单于の前に出て事情を打明けた。心配は要らぬと单于是言う。だが母の大閼氏たいえんが少々うるさいから——というのは、相当の老齡でありながら、单于の母は李緒と醜関係があつたらしい。单于是それを承知していたのである。匈奴きょうどの風習によれば、父が死ぬと、長子たる者が、亡父の妻妾さいしやうのすべてをそのまま引きついで己おのが妻妾とするのだが、さすがに生母だけはこの中にはいない。生みの母に対する尊敬だけは極端に男尊女卑の彼らでも有もっているのである——今しばらく北方へ隠れてもらいたい、ほとぼりがさめ

たころに迎えを遣^やるから、とつけ加えた。その言葉に従^{がくりんたつばんれい}つて、李陵は一時従者どもをつれ、西北の兜^{とう}衡^{かん}山^{ざん}（額^{がくりんたつばんれい}林達班嶺）の麓^{ふもと}に身を避^ひけた。

まもなく問題^{たいえん}の大閼氏^{たいえん}が病死し、单于^{ぜんう}の庭^{てい}に呼^よ戻^もされたとき、李陵^{りりよう}は人間が変^へわつたように見えた。というのは、今まで漢^{かん}に対する軍略^{ぐんりやく}にだけは絶対^{あづか}に与^よらなかつた彼^{みずか}が、自ら進^{すす}んでその相談^{さうだん}に乗^のろうと言^い出したからである。单^{たん}于是この変化^{へんげ}を見て大いに喜^{よろこ}んだ。彼は陵^{りやう}を右校王^{うこうおう}に任^{まか}じ、己^{おの}が娘^{むすめ}の一人^{ひとり}をめあわせた。娘^{むすめ}を妻^{つま}にという話は以前^{いぜん}にもあつたのだが、今まで断^{ことわ}わ

りつづけてきた。それを今度は躊躇なく妻としたのである。ちょうど酒泉張掖の辺を寇掠すべく南に出て行く一軍があり、陵は自ら請うてその軍に従った。しかし、西南へと取った進路がたまたま浚稽山の麓を過つたとき、さすがに陵の心は曇った。かつてこの地で己おのれに従つて死戦した部下どものことを考え、彼らの骨が埋められ彼らの血の染み込んだその砂の上を歩きながら、今の己が身の上を思うと、彼はもはや南行して漢兵と闘う勇気を失った。病と称して彼は独り北方へ馬を返した。

翌、太始元年、さいし且鞮侯单于そていこうぜんうが死んで、陵と親しかった左賢王さけんおうが後を嗣ついだ。狐鹿姑单于ころくこというのがこれである。

きようど匈奴の右校王うこうおうたる李陵りりようの心はいまだにハッキリしない。母妻子を族滅ぞくめつされた怨みうらは骨髓こつずいに徹とおしているものの、自ら兵を率みずかいて漢と戦うことができないのは、先ごろの経験で明らかである。ふたたび漢の地を踏むまいとは誓ったが、この匈奴の俗に化して終生安んじていられるかどうかは、新单于への友情をもつてしても、

まださすがに自信がない。考えることの嫌いな彼は、
イライラしてくると、いつも独り駿馬しゅんめを駆つて曠野こうやに
飛び出す。秋天しゅうてん一碧の下、嘎々かつかつと蹄ひづめの音を響かせて草
原となく丘陵となく狂氣のように馬を駆けさせる。何
十里かぶつとばした後、馬も人もようやく疲れてくる
と、高原の中の小川を求めてその澍ほとりに下り、馬に飲みずか
う。それから己おのれは草の上に仰向けにねころんで快い疲
労感にウツトリと見上げる碧落へきらくの潔きよさ、高さ、広さ。
ああ我もと天地間の一粒いちりゅう子のみ、なんぞまた漢こと胡と
あらんやとふとそんな気のすることもある。一しきり

休むとまた馬に跨またがり、がむしやらに駈かけ出す。終日
乗り疲れ黄雲こううんが落暉らつきに嚙くんずるころになつてようやく彼
は幕営ぼくえいに戻る。疲労だけが彼のただ一つの救いなので
ある。

司馬遷しばせんが陵りようのために弁じて罪をえたことを伝える者
があつた。李陵は別にありがたいとも気の毒だとも思
わなかつた。司馬遷とは互いに顔は知つてゐるし挨拶あいさつ
をしたことはあつても、特に交を結んだというほどの
間柄ではなかつた。むしろ、厭いやに議論ばかりしてうる
さいやつだくらいにしか感じてゐなかつたのである。

それに現在の李陵は、他人の不幸を実感するには、あまりに自分一個の苦しみと闘たたかうのに懸命であつた。よけいな世話とまでは感じなかつたにしても、特に済まないと感じることがなかつたのは事実である。

初め一概に野卑滑稽やひこっけいとしか映うつらなかつた胡地こちの風俗

が、しかし、その地の実際の風土・気候等を背景として考えてみるとけつして野卑でも不合理でもないことが、しだいに李陵さくほくにのみこめてきた。厚い皮革製の胡服こふくでなければ朔北さくほくの冬は凌しのげないし、肉食でなければ胡地

の寒冷に堪^たえるだけの精力を貯^{たくわ}えることができない。

固定した家屋を築かないのも彼らの生活形態から来た必然で、頭から低級と貶^{けな}し去るのは当たらない。漢人のふうをあくまで保^{たも}とうとするなら、胡地の自然の中での生活は一日といえども続けられないのである。

かつて先代の且鞮侯单于^{そていこうぜんう}の言つた言葉を李陵^{りりよう}は憶^{おぼ}え

ている。漢の人間が二言めには、己^{おの}が国を礼儀の国と

いい、匈奴^{きやうど}の行ないをもつて禽獸^{きんじゆう}に近いと看^み做^なすこと

を難じて、单于是言つた。漢人のいう礼儀とは何ぞ？

醜いことを表面だけ美しく飾り立てる虚飾^いの謂^いでは

ないか。利を好み人を嫉むこと、漢人と胡人といずれかはなはだしき？ 色に耽り財を貪ること、またいずれかはなはだしき？ 表べを剥ぎ去れば畢竟なんらの違いはないはず。ただ漢人はこれをごまかし飾ることを知り、我々はそれを知らぬだけだ、と。漢初以来の骨肉相喰む内乱や功臣連の排斥擠陷の跡を例に引いてこう言われたとき、李陵はほとんど返す言葉に窮した。実際、武人たる彼は今までにも、煩瑣な礼のための礼に対して疑問を感じたことが一再ならずあつたからである。たしかに、胡俗の粗野な正直さのほうが、美名

の影に隠れた漢人の陰險さより遙かに好ましい場合がしばしばあると思つた。諸夏しよかの俗を正しきもの、胡俗こぞくを卑しきものと頭から決めてかかるのは、あまりにも漢人的な偏見ではないかと、しだいに李陵にはそんな気がしてくる。たとえば今まで人間には名のほかに字あざながなければならぬものと、ゆえもなく信じ切つていたが、考えてみれば字が絶対に必要だという理由はどこにもないのであつた。

彼の妻はすこぶる大人おとなしい女だつた。いまだに主人の前に出るとおずおずしてろくに口も利きけない。しか

し、彼らの間にできた男の児は、少しも父親を恐れな
いで、ヨチヨチと李陵の膝ひざに匍はい上あがつて来る。その児
の顔に見入りながら、数年前長安ちやうあんに残してきた——そ
して結局母や祖母とともに殺されてしまった——子供
の倂おもかげをふと思いうかべて李陵は我おれしらず憮然ぶぜんとするの
であつた。

陵が匈奴きやうどに降くだるよりも早く、ちやうどその一年前か
ら、漢の中郎将ちゆうろうしやう蘇武そぶが胡地こちに引留められていた。

元来蘇武は平和の使節として捕虜ほりよ交換のために遣わ

されたのである。ところが、その副使某がたまたま匈奴の内紛ないふんに関係したために、使節団全員が囚とらえられることになってしまった。单于ぜんうは彼らを殺そうとはしないで、死をもつて脅おびかしてこれを降くだらしめた。ただ蘇武一人は降服を肯がえんじないばかりか、辱はずしめを避けようと自ら剣を取つて己おのが胸を貫いた。昏倒こんとうした蘇武に對する胡鑿こいの手当てというのがすこぶる変わつていた。地を掘つて坎あなをつくり熅火うんかを入れて、その上に傷者を寝かせその背中を蹈ふんで血を出させたと漢書かんじょには誌しるされてゐる。この荒療治のおかげで、不幸にも蘇武は半

日昏絶こんぜつしたのちにまた息を吹返した。且鞮侯单于そていこうは

すっかり彼に惚ほれ込んだ。数旬えいりつのちようやく蘇武の

身体が恢復かいふくすると、例の近臣衛律をやつてまた熱心に

降をすすめさせた。衛律は蘇武が鉄火の罵詈ばりに遭あひ、

すっかり恥をかいて手を引いた。その後蘇武が窖あなぐらの中

に幽閉ゆうへいされたとき旃毛せんもうを雪に和して喰くらいもつて飢えを

凌しのいだ話や、ついに北海ほっかい（バイカル湖）のひとり人なき

所に徙うつされて牡羊おひつじが乳を出さば帰るを許さんと言われ

た話は、持節じせつ十九年の彼の名とともに、あまりにも有

名だから、ここには述べない。とにかく、李陵りりようが悶もんもん々

の余生を胡地こちに埋めようとようやく決心せざるを得なくなつたころ、蘇武は、すでに久しく北海のほとりで独り羊を牧していたのである。

李陵りりようにとって蘇武そぶは二十年來の友であつた。かつて時を同じゆうして侍中じちゆうを勤めていたこともある。片意地でさばけないところはあるにせよ、確かにまれに見る硬骨の士であることは疑いないと陵は思っていた。天漢元年に蘇武が北へ立つてからまもなく、武の老母が病死したときも、陵は陽陵ようりようまでその葬を送つた。蘇武の妻が良人おつとのふたたび帰る見込みなしと知つて、

去つて他家に嫁かした噂うわさを聞いたのは、陵の北征出發直前のことであつた。そのとき、陵は友のためにその妻の浮薄をいたく憤つた。

しかし、はからずも自分が匈奴きょうどに降くだるようになってからのちは、もはや蘇武に会いたいとは思わなかつた。武が遙はるか北方に遷うつされていて顔を合わせずに済むことをむしろ助かつたと感じていた。ことに、己おのれの家族が戮りくせられてふたたび漢に戻る氣持を失つてからは、いつそうこの「漢節を持した牧羊者」との面接を避けたかつた。

狐鹿姑单于ころうくこぜんうが父の後あとを嗣ついでから数年後、一時蘇武が生死不明との噂うわさが伝わった。父单于がついに降服させることのできなかったこの不屈の漢使の存在を思出した狐鹿姑单于是、蘇武の安否を確かめるとともに、もし健在ならば今一度降服を勧告するよう、李陵に頼んだ。陵が武の友人であることを聞いていたのである。やむを得ず陵は北へ向かった。

姑且水こじよすいを北に溯さかのぼり郅居水しっきよすいとの合流点からさらに西北に森林地帯を突切る。まだ所々に雪の残っている川岸を進むこと数日、ようやく北海ほっかいの碧い水あおが森と野との

向こうに見え出したころ、この地方の住民なる丁^{てい}靈^{れい}族^{ぞく}の案内人は李陵の一行を一軒の哀れな丸太小^ご舎^やへと導いた。小舎の住人が珍しい人声に驚かされて、弓矢を手^{くま}に表へ出て来た、頭から毛皮を被^{かぶ}った鬚^{ひげ}ぼうぼうの熊^{くま}のような山男の顔の中に、李陵がかつての移^い中^{ちゆう}厩^{ゆう}監^{かん}蘇^そ子^し卿^{けい}の倂^{おも}を見出^{みだ}してからも、先方^{さき}がこ^この胡^こ服^{ふく}の大官^{だい}を前^{さき}の騎^き都^と尉^い李^り少^し卿^{けい}と認^りめるまでにはなおしばらくの時間が必要であつた。蘇^そ武^ぶのほうでは陵^{きやう}が匈奴^{つか}に事^きえていることも全然聞いていなかったのである。

感動が、陵の内に在^あつて今まで武との会見を避けさせていたものを一瞬压倒し去った。二人とも初めほとんどものが言えなかつた。

陵の供廻^{ともまわ}りどもの穹廬^{きゆうろ}がいくつか、あたりに組立てられ、無人の境が急に賑^{にぎ}やかになつた。用意してきた酒食がさつそく小舎^{こや}に運び入れられ、夜は珍しい歓笑の聲が森の鳥獸を驚かせた。滞在は数日に互^{わた}つた。

己^{おの}が胡服を纏^{まと}うに至つた事情を話すことは、さすがに辛^{つら}かつた。しかし、李陵は少しも弁解の調子を交えずに事実だけを語つた。蘇武がさりげなく語るその数

年間の生活はまったく惨憺さんたんたるものであつたらしい。

何年か以前に匈奴おけんおうの於軒王が獵をするとしてたまたまこ

こを過ぎ蘇武に同情して、三年間つづけて衣服食糧等

を給してくれたが、その於軒王おけんおうの死後は、凍いてついた

大地から野鼠のねずみを掘出して、飢えを凌しのがなければならな

い始末だと言う。彼の生死不明の噂うわさは彼の養つていた

畜群ひようとうが剽盗ひようとうどものために一匹残らずさらわれてしまつ

たことの訛伝かでんらしい。陵は蘇武の母の死んだことだけ

は告げたが、妻が子を棄すてて他家へ行つたことはさす

がに言えなかつた。

この男は何を目あてに生きているのかと李陵は怪しんだ。いまだに漢に帰れる日を待ち望んでいるのだろうか。蘇武の口うらから察すれば、いまさらそんな期待は少しももっていないようである。それではなんのためにこうした惨憺^{さんたん}たる日々をたえ忍んでいるのか？ 单于^{ぜんう}に降服を申出れば重く用いられることは請合^{うけあ}いだが、それをする蘇武^{そぶ}でないことは初めから分り切っている。陵の怪しむのは、なぜ早く自ら生命を絶たないのかという意味であつた。李陵^{りりよう}自身が希望のない生活を自らの手で断ち切りえないのは、いつのまにかこ

の地に根を下して^{おろ}了^{しま}つた数々の恩愛や義理のためであり、またいまさら死んでも格別漢のために義を立てることにもならないからである。蘇武の場合は違ふ。彼にはこの地での係累^{けいるい}もない。漢朝に対する忠信という点から考えるなら、いつまでも節旄^{せつぼう}を持して曠野^{こうや}に飢えるのと、ただちに節旄を焼いてのち自ら首刎^はねるのとの間に、別に差異はなさそうに思われる。はじめ捕えられたとき、いきなり自分の胸を刺した蘇武に、今となつて急に死を恐れる心が萌^{きざ}したとは考えられない。李陵は、若いころの蘇武の片意地を——滑稽^{こっけい}なくらい

強情な瘦我慢^{やせがまん}を思出した。单于^{ぜんう}は栄華を餌^えに極度の

困窮^{こんきゅう}

の中から蘇武を釣^つろうと試みる。餌につられるの

はもとより、苦難に堪^たええずして自ら殺すこともまた、

单于に（あるいはそれによつて象徴される運命に）負

けることになる。蘇武はそう考えているのではなから

うか。運命と意地の張合いをしているような蘇武の姿

が、しかし、李陵には滑稽や笑止^{しょうし}には見えなかった。

想像を絶した困苦・欠乏・酷寒・孤独を、（しかもこれ

から死に至るまでの長い間を）平然と笑殺していかせ

るものが、意地だとすれば、この意地こそは誠^{まこと}に凄^{すさま}じ

くも壮大なものと言わねばならぬ。昔の多少は大人おとなげなく見えた蘇武の瘦我慢やせがまんが、かかる大我慢にまで成長しているのを見て李陵は驚嘆した。しかもこの男は自分の行ないが漢にまで知られることを予期していない。自分がふたび漢に迎えられることはもとより、自分がかかる無人の地で困苦と戦いつつあることを漢はおろか匈奴きょうどの单于にさえ伝えてくれる人間の出て来ることをも期待していなかった。誰にもみとられずに独り死んでいくに違いないその最後の日に、自ら顧みみて最後まで運命を笑殺しえたことに満足して死んでいこう

というのだ。誰一人己おのが事蹟じせきを知つてくれなくともさしつかえないというのである。李陵りりようは、かつて先代単于ぜんうの首を狙ねらいながら、その目的を果たすとも、自分がそれをもつて匈奴きようどの地を脱走しえなければ、せつかくの行為が空むなしく、漢にまで聞こえないであろうことを恐れて、ついに決行の機を見出しえなかつた。人に知られざることを憂えぬ蘇武そぶを前にして、彼はひそかに冷汗の出る思いであつた。

最初の感動が過ぎ、二日三日とたつうちに、李陵の

中にやはり一種のこだわりができてくるのをどうすることもできなかつた。何を語るにつけても、己おのれの過去と蘇武のそれとの対比がいちいちひつかかってくる。蘇武は義人ぎじん、自分は売国奴ばいこくどと、それほどハッキリ考えはしないけれども、森と野と水との沈黙によつて多年の間鍛え上げられた蘇武の厳しさきびの前には己の行為に對する唯一の弁明であつた今までのわが苦悩のごときひとたまは一溜りもなく圧倒されるのを感じないわけにいかない。それに、氣のせいかな、日ひにちが立つにつれ、蘇武の己に對する態度の中に、何か富者が貧者に對すると

きのような——己の優越を知つたうえで相手に寛大であらうとする者の態度を感じはじめた。どことハツキリはいえないが、どうかした拍子ひょうしにひよいとそういうものの感じられることがある。縊縷ぼろをまとうた蘇武の目の中に、ときとして浮かぶかすかな憐愍れんびんの色を、豪奢ごうしゃな貂裘ちようきゆうをまとうた右校王李陵はなによりも恐れた。十日ばかり滞在したのち、李陵は旧友に別れて、悄然しょうぜんと南へ去った。食糧衣服の類は充分に森の丸木ごや小舎に残してきた。

李陵は单于ぜんうからの依嘱いしよくたる降服勧告についてはどう

とう口を切らなかつた。蘇武そぶの答えは問うまでもなく明らかであるものを、何もいまさうそんな勧告によつて蘇武をも自分をも辱はづかしめるには当たらないと思つたからである。

南に帰つてからも、蘇武の存在は一日も彼の頭から去らなかつた。離れて考えるとき、蘇武の姿はかえつていつそうきびしく彼の前に聳そびえているように思われる。

李陵自身、匈奴きやうどへの降服という己おのれの行為をよしとしてゐるわけではないが、自分の故国につくした跡と、

それに対して故国の己に酬^{むく}いたところとを考えるなら、
いかに無情な批判者といえども、なお、その「やむを得
なかつた」ことを認めるだろうとは信じていた。とこ
ろが、ここに一人の男があつて、いかに「やむを得な
い」と思われる事情を前にしても、断じて、自らにそ
れは「やむを得ぬのだ」という考えかたを許そうとし
ないのである。

飢餓も寒苦も孤独の苦しみも、祖国の冷淡も、己の
苦節がついに何人にも知られないだろうというほとん
ど確定的な事実も、この男にとって、平生の節義を改

めなければならぬほどのやむを得ぬ事情ではないのだ。蘇武の存在は彼にとって、崇高な訓誡くんかいでもあり、いらだたしい悪夢でもあつた。ときどき彼は人を遣つかわして蘇武の安否を問わせ、食品、牛羊、絨氈じゅうせんを贈つた。蘇武をみたい気持と避けたい気持とが彼の中で常に闘つていた。

数年後、今一度李陵は北海ほっかいのほとりの丸木小舎ごやを訪たずねた。そのとき途中で雲中うんちゅうの北方まもを成えいる衛兵へいらに会あひ、彼らの口から、近ごろ漢の辺境では太守たいしゅ以下吏民りみんが皆

白服をつけていることを聞いた。人民がことごとく服を白くしているとあれば天子の喪もに相違ない。李陵は武帝ぶていの崩ほうじたのを知った。北海ほとりの澣いたに到つてこのことを告げたとき、蘇武そぶは南に向かつて号哭ごうこくした。慟哭どうこく数日、ついに血を嘔はくに至つた。その有様を見ながら、李陵はしだいに暗く沈んだ気持になつていった。彼はもちろん蘇武の慟哭しんしの真摯しんしさを疑うものではない。その純粹はげな烈しい悲嘆には心を動かされずにはいられない。だが、自分には今一滴の涙も泛うかんでこないのである。蘇武は、李陵のように一族を戮りくせられるところそ

なかつたが、それでも彼の兄は天子の行列にさいして
ちよつとした交通事故を起こしたために、また、彼の
弟はある犯罪者を捕ええなかつたことのために、とも
に責を負うて自殺させられている。どう考えても漢の
朝から厚遇ちようされていたとは称しがたいのである。それ
を知つてのうえで、今日の前に蘇武の純粹な痛哭つうこくを見
ているうちに、以前にはただ蘇武の強烈な意地とのみ
見えたものの底に、実は、譬えたとようもなく清冽せいれつな純粹
な漢の国土への愛情（それは義とか節とかいう外から
押しつけられたものではなく、抑えおさえようとして抑えら

れぬ、こんこんと常に湧出^{わきで}る最も親身な自然な愛情が湛^{たた}えられていることを、李陵ははじめて発見した。李陵は己^{おのれ}と友とを隔てる根本的なものにぶつかつていやでも己^{おのれ}自身に對する暗い懷疑に追いやられざるをえないのである。

蘇武^{そぶ}の所から南へ歸つて来ると、ちようど、漢からの使者が到着したところであつた。武帝^{ぶてい}の死と昭帝^{しょうてい}の即位とを報じてかたがた当分の友好関係を——常に一年とは続いたことのない友好関係だつたが——結ぶた

めの平和の使節である。その使いとしてやって来たのが、はからずも李陵りりようの故人・隴西ろうせいの任立政じんりつせいら三人であつた。

その年の二月武帝が崩じて、僅わずか八歳の太子弗陵ふつりようが位を嗣つぐや、遺詔いじようによつて侍中奉車都尉霍光だいいしが大將軍として政を輔まつりごとけることになつた。霍光はもと、李陵と親しかつたし、左將軍となつた上官桀じようかんけつもまた陵の故人であつた。この二人の間に陵を呼返そうとの相談ができ上がつたのである。今度の使いにわざわざ陵の昔の友人が選ばれたのはそのためであつた。

单于せんうの前で使者の表向きの用が済むと、盛んな酒宴が張られる。いつもは衛律えいりつがそうした場合の接待役を引受けるのだが、今度は李陵の友人が来た場合とて彼も引張り出されて宴につらなつた。任立政は陵を見たが、匈奴きょうどの大官連の並んでいる前で、漢に帰れとは言えない。席を隔てて李陵を見ては目配せをし、しばしば己おのれの刀環とうかんを撫なでて暗にその意を伝えようとした。陵はそれを見た。先方の伝えんとするところもほぼ察した。しかし、いかなるしぐさをもつて応こたえるべきかを知らない。

公式の宴が終わった後で、李陵・衛律らばかりが残つて牛酒と博戯ばくぎとをもつて漢使をもてなした。そのとき任立政が陵に向かつて言う。漢ではいまや大赦令たいしやれいが降り万民は太平の仁政じんせいを楽しんでいる。新帝はいまだ幼少のこととて君が故旧たる霍子孟かくしもう・上官少叔じょうかんしやうしゆくが主上たすを輔けて天下の事を用いることとなつたと。立政は、衛律えいりつをもつて完全に胡人こじんになり切つたものと見倣みなして——事実それに違いなかつたが——その前では明らかにさまに陵に説くのを憚はばつた。ただ霍光かくこうと上官桀じょうかんけつとあの名を挙げて陵の心を惹ひこうとしたのである。陵は黙もく

して答えない。しばらく立政りっせいを熟視してから、己おのが髪を撫なでた。その髪も椎結ついきいとてすでに中国のふうではない。ややあつて衛律が服を更かえるために座を退いた。初めて隔てのない調子で立政が陵の字あざなを呼んだ。少卿しょうけいよ、多年の苦しみはいかばかりだったか。霍子孟かくしもうと上官少叔じょうかんしょうしゆくからよろしくとのことであつたと。その二

人の安否を問返す陵のよそよそしい言葉におつかぶせるようにして立政がふたたび言った。少卿よ、帰ってくれ。富貴ふうきなどは言うに足りぬではないか。どうか何もいわずに帰ってくれ。蘇武そぶの所から戻ったばかりの

こととて李陵も友の切なる言葉に心が動かぬではない。しかし、考えてみるまでもなく、それはもはやどうにもならぬことであつた。「帰るのは易い。やすだが、また辱しめを見るだけのことではないか？ 如何？いかに」言葉半ばにして衛律が座に還つてきた。かえ二人は口を噤んだ。

会が散じて別れ去るとき、任立政はさりげなく陵のそばに寄ると、低声で、ついに帰るに意なきやを今一度尋ねた。陵は頭を横にふつた。丈夫じょうふふたたび辱めらるるあたわずと答えた。その言葉がひどく元気のなかつたのは、衛律に聞こえることを惧れたためではな

い。

後五年、昭帝の始元しげん六年の夏、このまま人に知られ

ず北方に窮死きゆううしすると思われた蘇武そぶが偶然にも漢に帰れ

ることになった。漢の天子が上林苑じやうりんえん中で得た雁かりの足

に蘇武の帛書はくしよがついていた云々うんぬんというあの有名な話は、

もちろん、蘇武そぶの死を主張する单于ぜんうを説破するため

でたらめである。十九年前蘇武に従つて胡地こちに来た

常恵じやうけいという者が漢使に遭あつて蘇武の生存を知らせ、こ

の嘘うそをもつて武を救出すくいだすように教えたのであつた。

さつそく北海ほっかいの上に使いが飛び、蘇武は单于の庭ていにつれ出された。李陵りりようの心はさすがに動揺した。ふたたび漢に戻れようと戻れまいと蘇武の偉大さに変わりはないが、したがって陵の心の咎しもとたるに変わりはないに違いないが、しかし、天はやつぱり見ていたのだという考えが李陵をいたく打った。見ていないようである、やつぱり天は見ている。彼は肅然しゆくぜんとして懼おそれた。今でも、己おのれの過去をけつして非なりとは思わなければならないけれども、なおここに蘇武という男があつて、無理ではなかつたはずの己の過去をも恥ずかしく思わせることを堂々と

やつてのけ、しかも、その跡が今や天下に顕彰けんしょうされることになったという事実は、なんとしても李陵にはこたえた。胸をかきむしられるような女々めめしい己の氣持が羨望せんぼうではないかと、李陵は極度に惧おそれた。

別れに臨んで李陵は友のために宴を張った。いいたいことは山ほどあつた。しかし結局それは、胡こに降くだつたときの己おのれの志が那边なへんにあつたかということ。その志を行なう前に故国の一族が戮りくせられて、もはや帰るに由なくなつた事情とに尽きる。それを言えば愚痴ぐちになつてしまう。彼は一言もそれについてはいわなかつ

た。ただ、宴たけなわ酣たけなわにして堪えかねて立上がり、舞いかつ
歌うた。

ばんりをゆきすぎさばくをわたる
径万里兮度沙幕

きみのためしやうとなつてきやうどにふるう

為君将兮奮匈奴

みちきゆうぜつししじんくだけ

路窮絶兮矢刃摧

ししゆうほろびなすでおつ

士衆滅兮名已隕

ろうぼすでにしすおんにむくいんとほつするもまたいづくにかかえらん

老母已死雖欲報恩将安帰

歌っているうちに、声が顫ふるえ涙が頬ほおを伝わった。

女々^{めめ}しいぞと自ら叱^{みづか}りながら、どうしようもなかった。

蘇武^{そぶ}は十九年ぶりで祖国に帰って行つた。

司馬遷^{しばせん}はその後も孜々^{しし}として書き続けた。

この世に生きることをやめた彼は書中の人物としての
のみ活^いきていた。現実の生活ではふたたび開かれるこ
とのなくなつた彼の口が、魯仲連^{ろちゆうれん}の舌端^{ぜつたん}を借りてはじ
めて烈々^{れつれつ}と火を噴くのである。あるいは伍子胥^{ごししよ}となつ
て己^{おの}が眼を抉^{えぐ}らしめ、あるいは藺相如^{りんしやうじよ}となつて秦王^{しんおう}を
叱^{しつ}し、あるいは太子丹^{たいしたん}となつて泣いて荊軻^{けいか}を送つた。

楚その屈原くつげんの憂憤うつぶんを叙して、そのまさに汨羅べきらに身を投ぜんとして作るころの懷沙之賦かいさのふを長々と引用したとき、司馬遷にはその賦がどうしても己おのれ自身の作品のごとき気がしてしかたがなかった。

稿を起こしてから十四年、腐刑ふけいの禍わざわいに遭あつてから八年。都では巫蠱ふこの獄ごが起こり戾太子れいたいしの悲劇が行なわれていたころ、父子相伝ふしそうでんのこの著述がだいたい最初の構想どおりの通史つうしがひととおりでき上がった。これに増補改刪かいさんすいこう推敲を加えているうちにまた数年がたつた。史記しき百三十卷、五十二万六千五百字が完成したのは、

すでに武帝の崩御ぶつぎよに近いころであつた。

列伝第七十太史公自序の最後の筆を擱おいたとき、司

馬遷は几きに凭よつたまま惘然ぼうぜんとした。深い溜息ためいきが腹の底

から出た。目は庭前の槐樹えんじゆの茂みに向かつてしばらく

はいたが、実は何ものをも見ていなかった。うつろな

耳で、それでも彼は庭のどこからか聞こえてくる一匹

の蟬せみの声に耳をすましているようにみえた。歓びよろこがあ

るはずなのに気の抜けた漠然ぼくぜんとした寂しさ、不安のほ

うが先に来た。

完成した著作を官に納め、父の墓前にその報告をす

るまではそれでもまだ気が張っていたが、それらが終
わると急に酷い虚脱ひどの状態が来た。憑依ひょういの去った巫者ふしや
のように、身も心もぐったりとくずおれ、まだ六十を
出たばかりの彼が急に十年も年をとったように耄ふけた。
武帝の崩御ほうぎよも昭帝の即位もかつてのさきの
太史令司馬遷たいしれいしばせんの脱殻ぬけがらにとつてはもはやなんの意味もも
たないように見えた。

前に述べた任立政じんりつせいらが胡地こちに李陵りりやうを訪ねて、ふたたび都に戻つて来たころは、司馬遷はすでにこの世に亡なかつた。

蘇武そぶと別れた後の李陵については、何一つ正確な記録は残されていない。元平元年げんぺいに胡地こちで死んだということのほかは。

すでに早く、彼と親しかった狐鹿姑单于ころくこぜんうは死に、その子壺衍鞬单于こえんていの代となっていたが、その即位にからんで左賢王さけんおう、右谷蠡王うろくりおうの内紛があり、閼氏えんしや衛律えいりつらと対抗して李陵も心ならずも、その紛争にまきこまれたろうことは想像に難かたくない。

漢書かんじょの匈奴伝きやうどでんには、その後、李陵の胡地こちで儲もけた子

が烏籍都尉うせきといを立てて单于とし、呼韓邪单于こかんやせんうに対抗して
ついに失敗した旨が記されている。宣帝せんていの五鳳二年ごほうの
ことだから、李陵が死んでからちょうど十八年めにあ
たる。李陵の子とあるだけで、名前は記されていない。



李 陵
中島 敦 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「李陵・山月記・弟子・名人伝」角川文庫、角川書店
1968（昭和 43）年 9 月 10 日改版初版発行
1998（平成 10）年 5 月 30 日改版 52 版発行

入力：佐野良二

校正：松永正敏

2001 年 3 月 14 日公開

2011 年 2 月 27 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.8(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ